



第2章 豊中市の現状

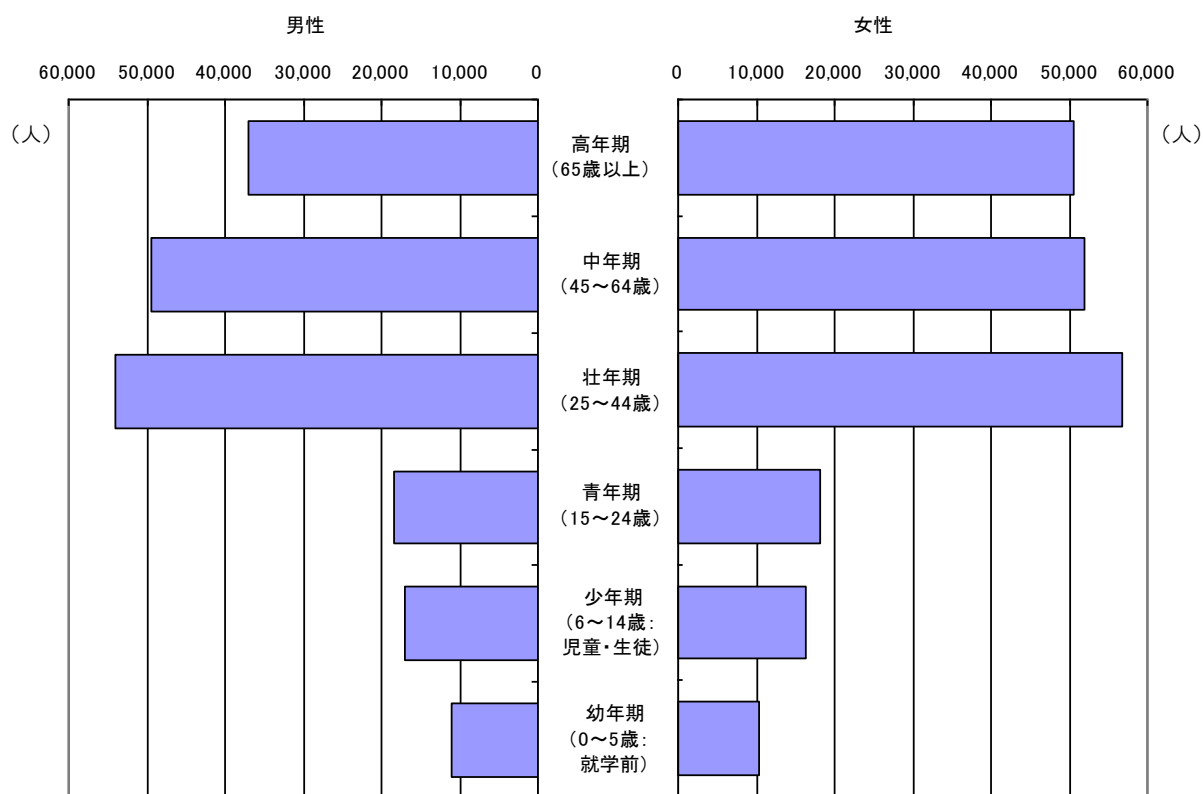
● 豊中市の人口構造

豊中市の人口構造をみると、総人口（平成24年（2012年）4月1日現在）は391,040人であり、そのうち男性は186,972人（47.8%）、女性は204,068人（52.2%）となっています。また、0～14歳の年少人口は54,565人（14.0%）、15～64歳の生産年齢人口は248,725人（63.6%）、65歳以上の高齢者人口は87,750人（22.4%）となっています。

年少人口が減少するとともに、高齢者人口は増加傾向にあり、少子高齢化の傾向が急速に進んでいます。

ライフステージ別^{*1}でみると、幼年期^{*2}（0～5歳）が21,278人（5.4%）、少年期^{*3}（6～14歳）が33,287人（8.5%）、青年期（15～24歳）が36,662人（9.4%）、壮年期（25～44歳）が110,653人（28.3%）、中年期（45～64歳）が101,410人（25.9%）、高年期（65歳以上）が87,750人（22.4%）となっています。

図表1 人口構造（平成24年4月1日現在）



資料：住民基本台帳に基づく年齢別人口（外国人登録者除く）

*1 ライフステージ：人の生涯における人生の各段階のこと。
 *2 幼年期：就学前の児童（0～5歳）のこと。
 *3 少年期：小学生児童、中学生生徒（6～14歳）のこと。

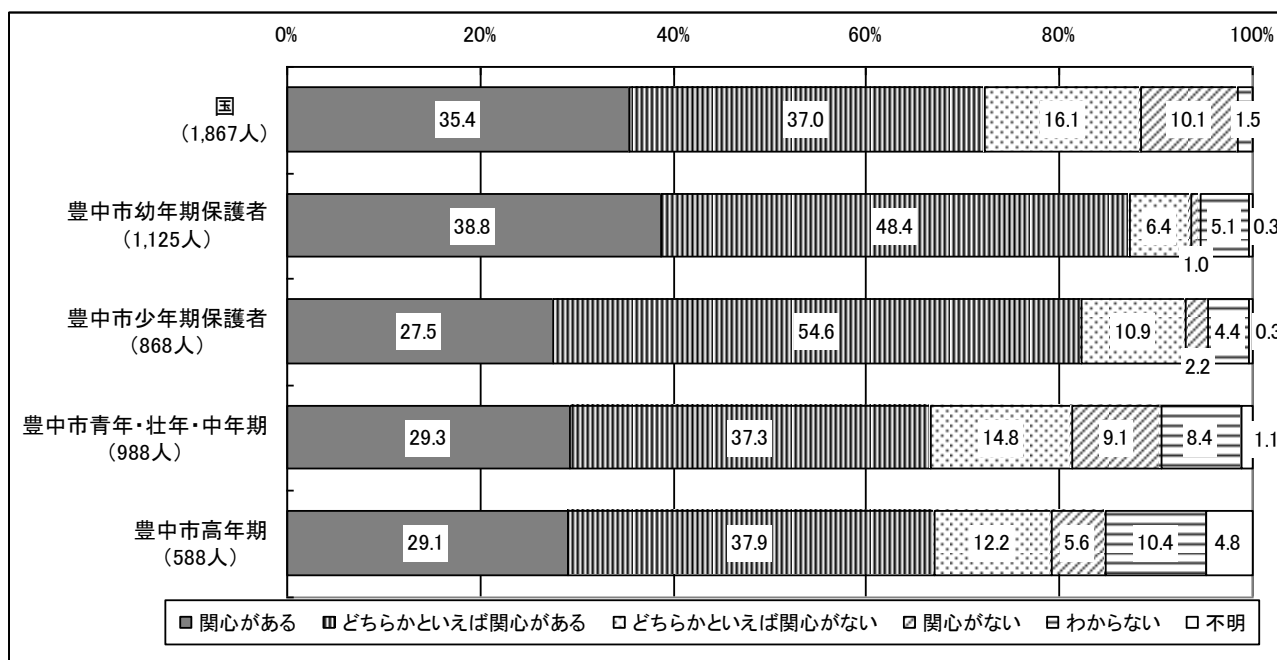
I 食育への関心と食に関する情報について

● 食育への関心

食育への関心をみると、「関心がある」「どちらかといえば関心がある」は幼年期（0～5 歳）保護者で 87.2%、少年期（6～14 歳）保護者で 82.1%、青年・壮年・中年期（15～64 歳）で 66.6%、高年期（65 歳以上）で 67.0%となっており、幼年期（0～5 歳）保護者と少年期（6～14 歳）保護者で関心が高くなっています。

性別でみると、「関心がない」「どちらかといえば関心がない」は青年期（15～24 歳）男性で 41.4%、青年期（15～24 歳）女性で 31.0%、壮年期（25～44 歳）男性で 37.2%、壮年期（25～44 歳）女性で 14.5%、中年期（45～64 歳）男性で 28.2%、中年期（45～64 歳）女性で 15.9%となっており、女性に比べ男性の関心度が低くなっています。

図表2 食育への関心度



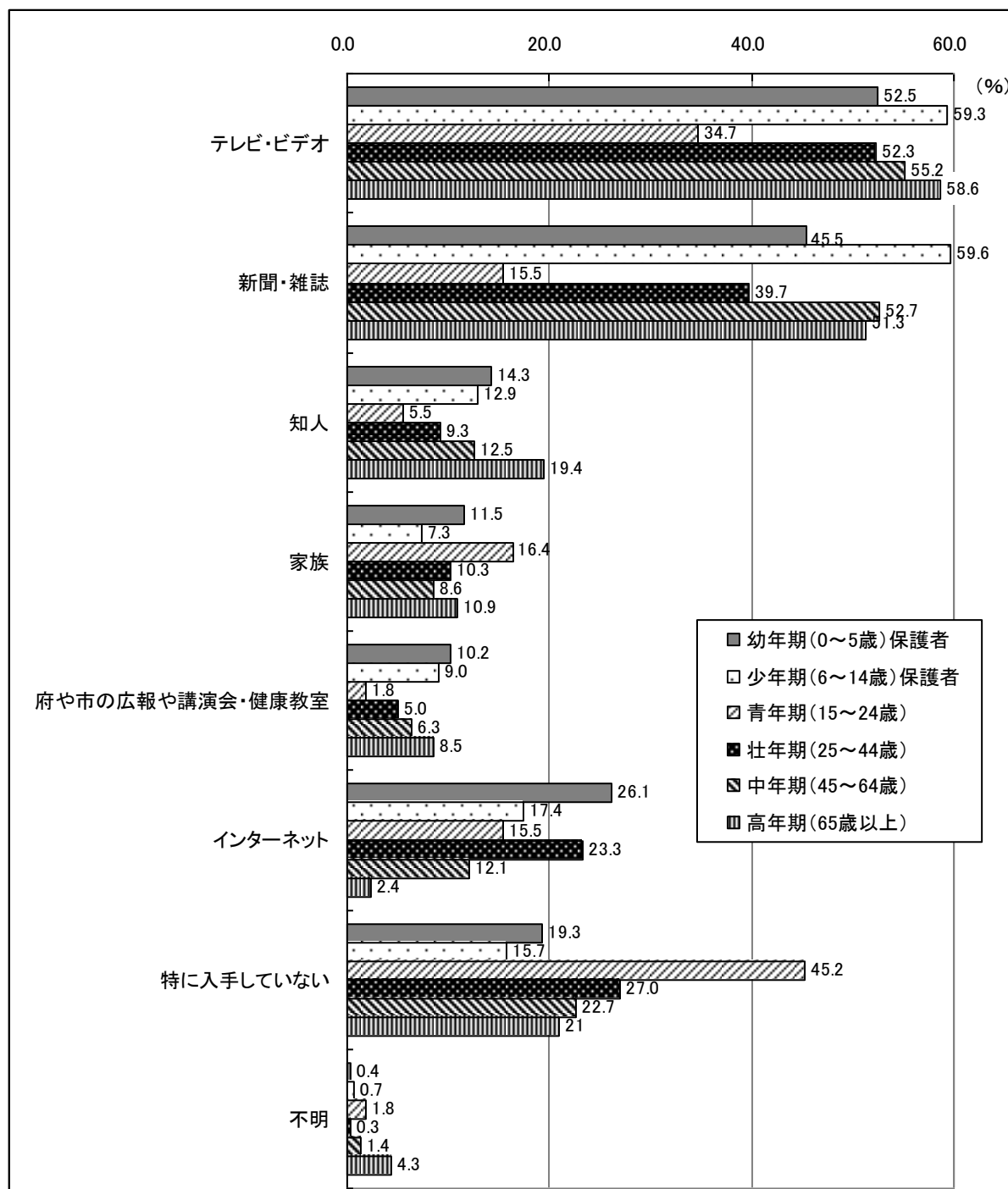
資料：内閣府「食育に関する意識調査」平成 23 年 12 月調査（「不明」は無し）

豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

● 食育に関する情報の入手先

食育に関する情報の入手先をみると、青年期（15～24 歳）を除くどのライフステージも「テレビ・ビデオ」「新聞・雑誌」をあげる人が多くなっています。一方、青年期（15～24 歳）では、「特に入手していない」人が最も多くなっています。

図表3 食育に関する情報の入手先

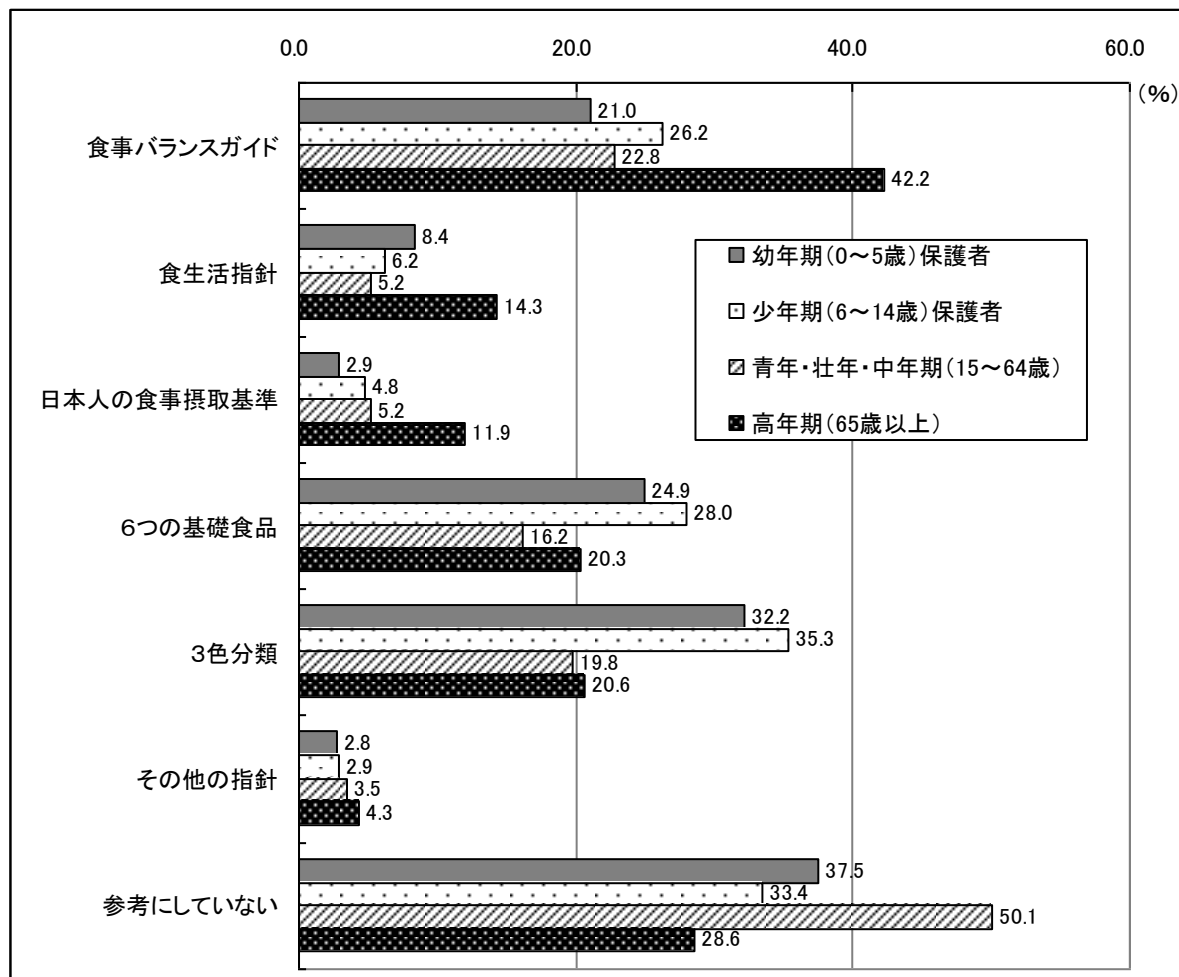


資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

● 健全な食生活のため参考とする指針

健全な食生活のため参考とする指針をみると、高年期（65 歳以上）では「食事バランスガイド」をあげる人が約 4 割、幼年期（0～5 歳）保護者と少年期（6～14 歳）保護者では「3 色分類」をあげる人が約 3 割います。一方、このような指針を参考としていない人は多く、特に青年・壮年・中年期（15～64 歳）では半数を超えています。

図表4 健全な食生活のため参考とする指針

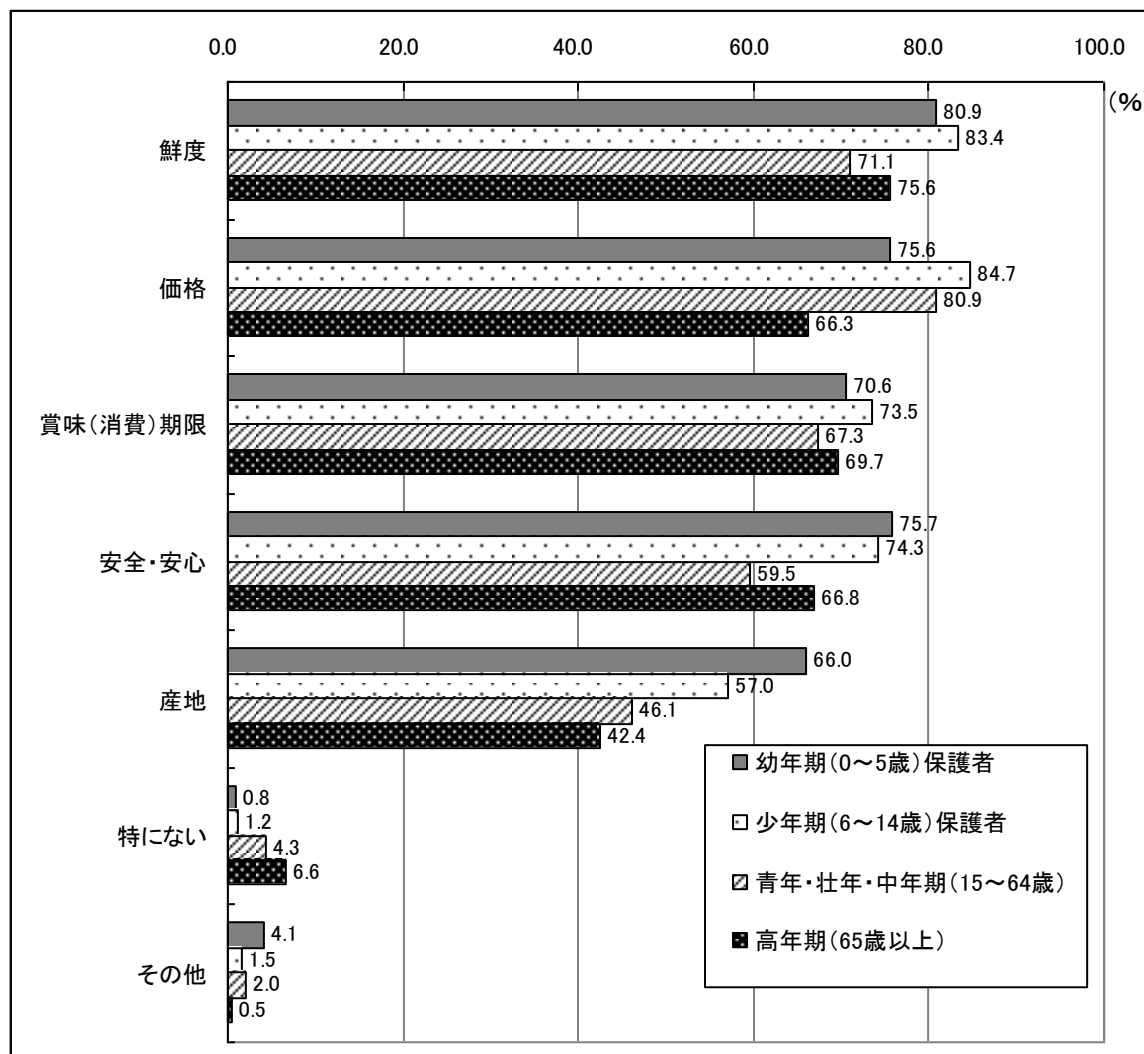


資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

● 食材の選定基準

食材購入の選定基準としては、各ライフステージとも「鮮度」、「価格」、「賞味（消費）期限」を多くあげています。「安全・安心」をあげる人は、幼年期（0～5 歳）保護者で 75.7%、少年期（6～14 歳）保護者で 74.3%、青年・壮年・中年期（15～64 歳）で 59.5%、高年期（65 歳以上）で 66.8%となっています。

図表5 食材の選定基準

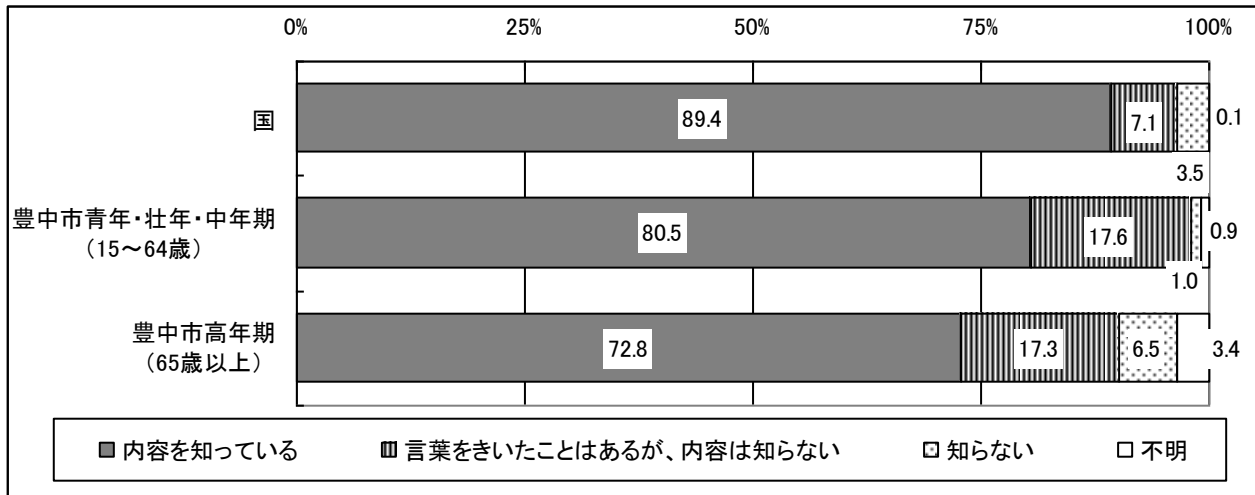


資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

● メタボリックシンドローム*¹の認知度

メタボリックシンドロームの認知度をみると、青年・壮年・中年期（15～64 歳）で「内容を知っていた」が 80.5%、高年期（65 歳以上）で 72.8%となっています。

図表6 メタボリックシンドロームの認知度



資料：内閣府「食育に関する意識調査」平成 22 年 12 月調査
豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

● 実際の体型とボディイメージ

BMI*²判定が「普通」であるにも関わらず、「太り気味」「太りすぎ」と考える人が 39.2%となっており、実際の体型とボディイメージの差異（瘦身志向）がみられます。

図表7 実際の体型とボディイメージ（青年・壮年・中年期（15～64 歳））

		ボディイメージ (%)						
		合計(人)	太りすぎ	太り気味	普通	やせ気味	やせすぎ	無回答
BMI	全体	988	10.6	31.6	43.8	11.2	1.4	1.3
	18.5 未満 (低体重)	140	-	1.4	38.6	50.7	9.3	-
	18.5 以上 25 未満 (普通)	671	4.9	34.3	54.4	5.8	0.1	0.4
	25 以上 30 未満 (太り気味)	120	44.2	52.5	2.5	-	-	0.8
	30 以上 (肥満)	24	66.7	25.0	8.3	-	-	-
	無回答	33	9.1	33.3	27.3	3.0	-	27.3

資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

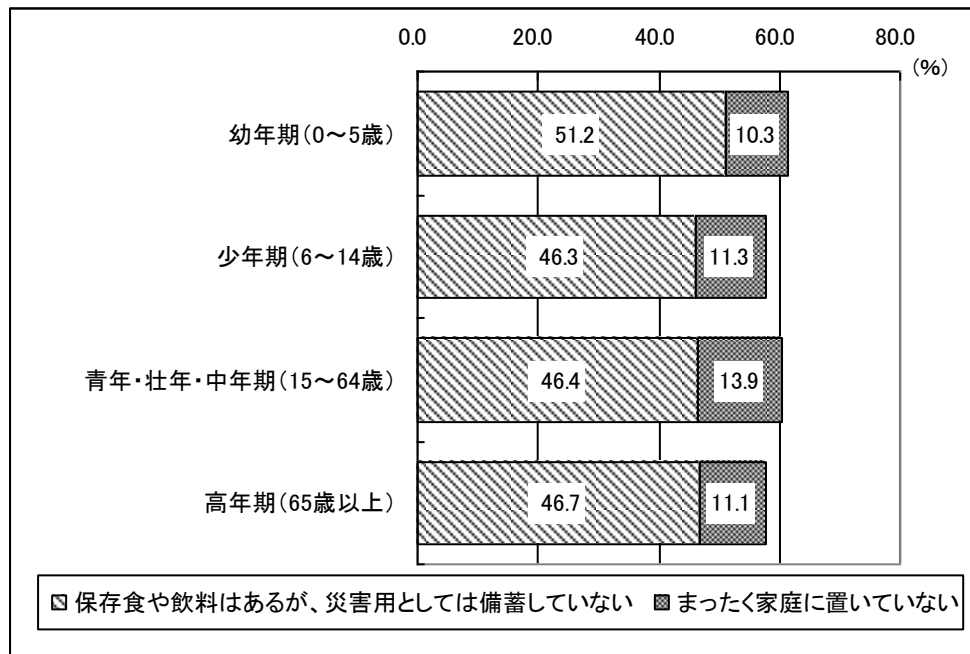
*1 メタボリックシンドローム：糖尿病などの生活習慣病は、それぞれの病気が別々に進行するのではなく、おなかのまわりの内臓に脂肪が蓄積した内臓脂肪型肥満が大きいかかわるものであることがわかってきました。内臓脂肪型肥満に加えて、高血糖、高血圧、脂質異常のうちいずれか2つ以上を合わせもった状態を、メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）といいます。

*2 BMI：肥満度の判定方法の一つで、ボディ・マス・インデックス。18.5 未満が「低体重」、18.5 以上 25.0 未満が「普通」、25.0 以上が「肥満」となる。体重(kg)÷身長(m)÷身長(m)で求められる指数。

● 非常食*¹等の備蓄の状況

「保存食*²や飲料はあるが、災害用としては備蓄していない」人が各年代とも 50%前後、「まったく家庭に置いていない」人が各年代で 10%強います。

図表8 災害用に保存食や飲料等を備蓄していない人



資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

*1 非常食：アルファ米、カンパンなど、災害に備えて準備しておく食料のこと。

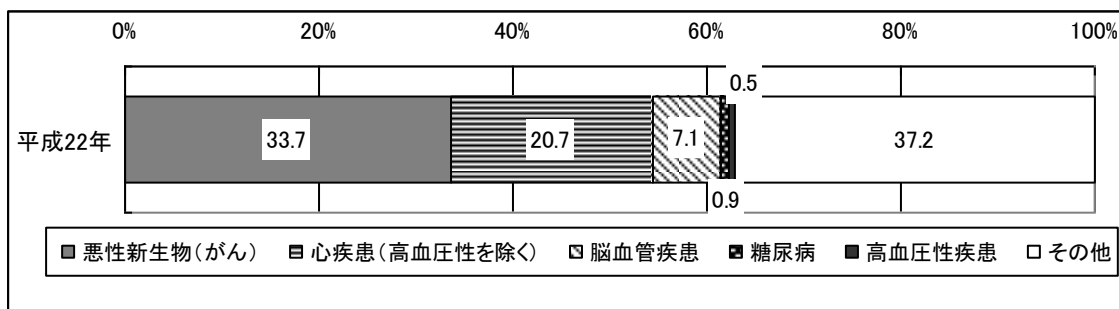
*2 保存食：缶詰、乾物、インスタント食品やフリーズドライなど日持ちするよう加工された食品のこと。

Ⅱ 食生活と健康について

● 死因別割合

平成 22 年（2010 年）の豊中市における死因別割合をみると、生活習慣病といわれる悪性新生物（がん）、心疾患、脳梗塞や脳出血などの脳血管疾患で全体の約 6 割を占めています。

図表9 死因別の割合（平成 22 年）

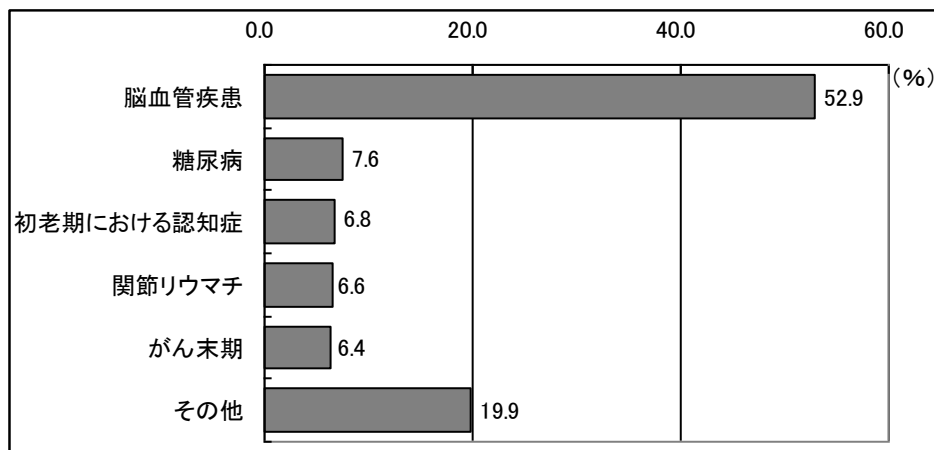


資料：平成 22 年人口動態

● 介護保険制度における第 2 号被保険者*¹の状況

介護保険制度における豊中市の第 2 号被保険者のうち、要介護または要支援と認定された原因疾病は、平成 24 年（2012 年）3 月 31 日でみると、「脳血管疾患」が半数以上を占めています。

図表10 要支援・要介護認定の原因となった疾病



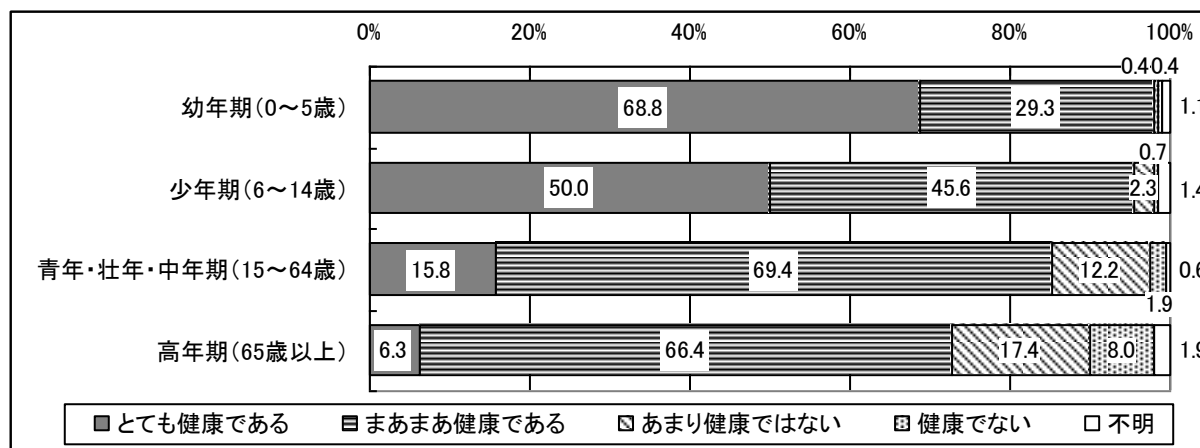
資料：豊中市高齢者支援課調べ(平成 24 年 3 月 31 日現在)

*1 第 2 号被保険者：介護保険法第9条第2号に規定され、40～64 歳までの健康保険などの公的な医療保険に加入している人をさします。

● 健康状態

健康状態をみると、幼年期（0～5 歳）、少年期（6～14 歳）とも大半が健康（「とても健康である」または「まあまあ健康である」）としていますが、青年・壮年・中年期（15～64 歳）になると健康状態がよくない（「あまり健康ではない」、「健康でない」）人が1 割を超え、高年期（65 歳以上）では 25. 4%になっています。

図表11 健康状態

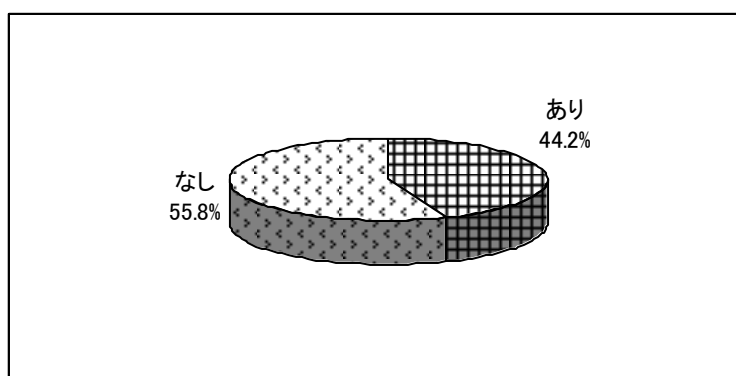


資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

● 疾患別受診状況

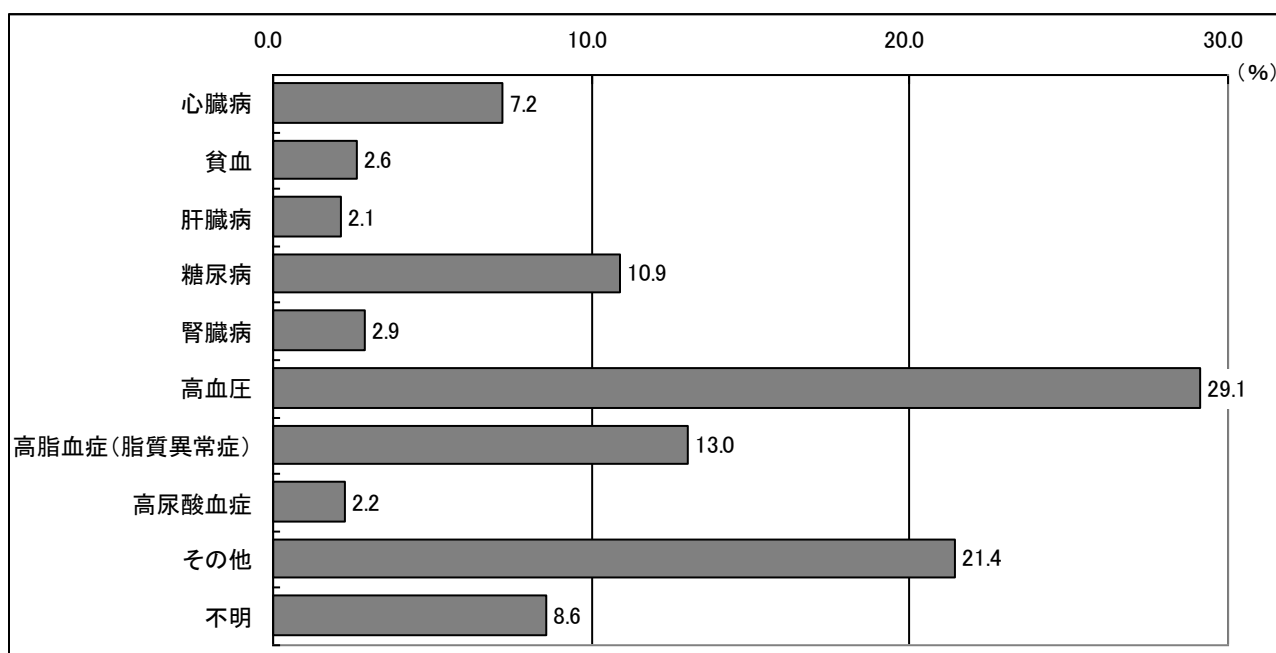
現在、何らかの病気で治療中の人は 44. 2%（1, 251 人中 522 人）で、「高血圧」が最も多くなっています。高血圧や高脂血症（脂質異常症）といった塩分の取りすぎやエネルギーの過剰な摂取などの「食生活」が大きく影響する疾病での受診が多い傾向にあります。

図表12 治療中の病気の有無



資料：豊中市「市民の生活習慣と健康意識に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

図表13 治療中の病気（複数回答）

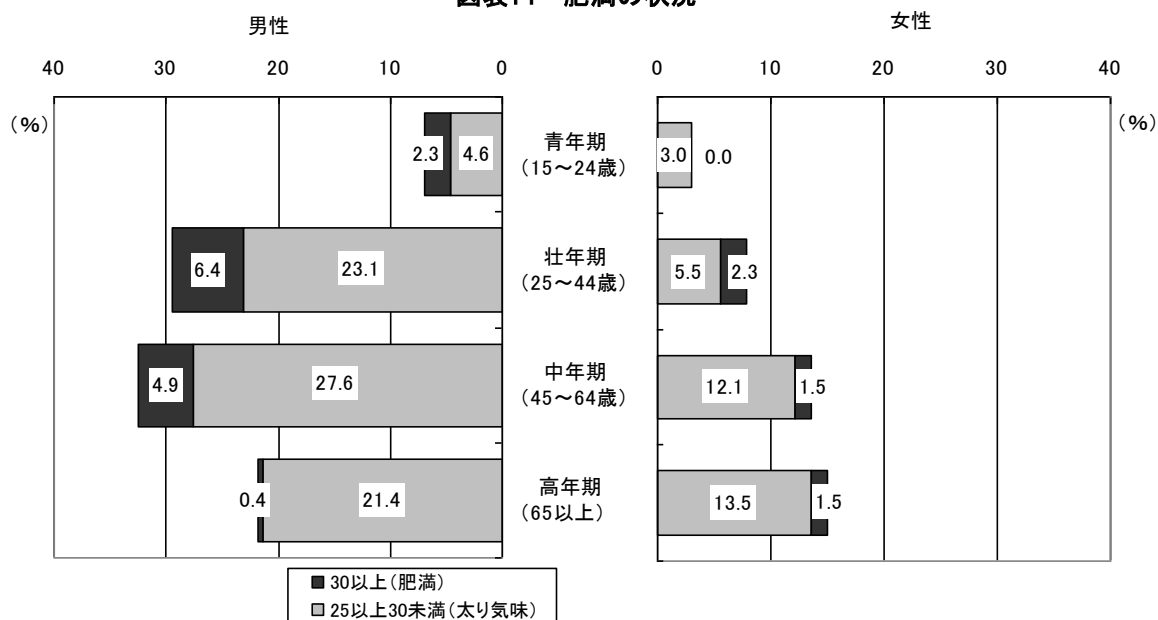


資料：豊中市「市民の生活習慣と健康意識に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

● 肥満の状況

男性にBMI判定25以上の「太り気味」、「肥満」が多くみられます。また、男性では青年期（15～24歳）から壮年期（25～44歳）、女性では壮年期（25～44歳）から中年期（45～64歳）で「肥満」の割合が急増しています。

図表14 肥満の状況

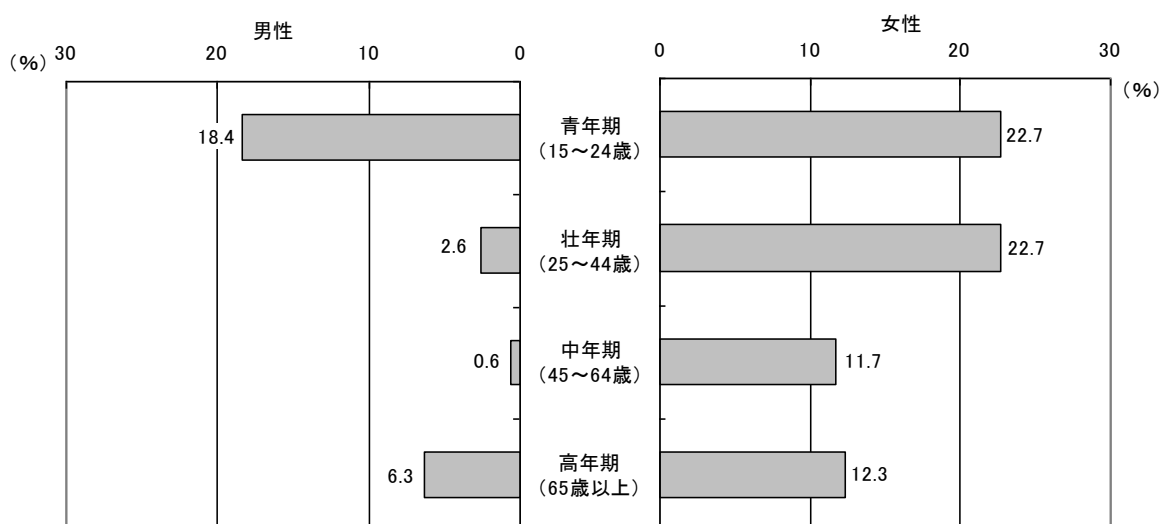


資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成23年10月

● やせの状況

男性より女性にBMI判定18.5未満の「低体重」が多くみられます。また、男性では青年期（15～24歳）、女性では青年期（15～24歳）・壮年期（25～44歳）で「低体重」の割合が多くなっています。

図表15 やせの状況



資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成23年10月

● 生活のリズムの状況

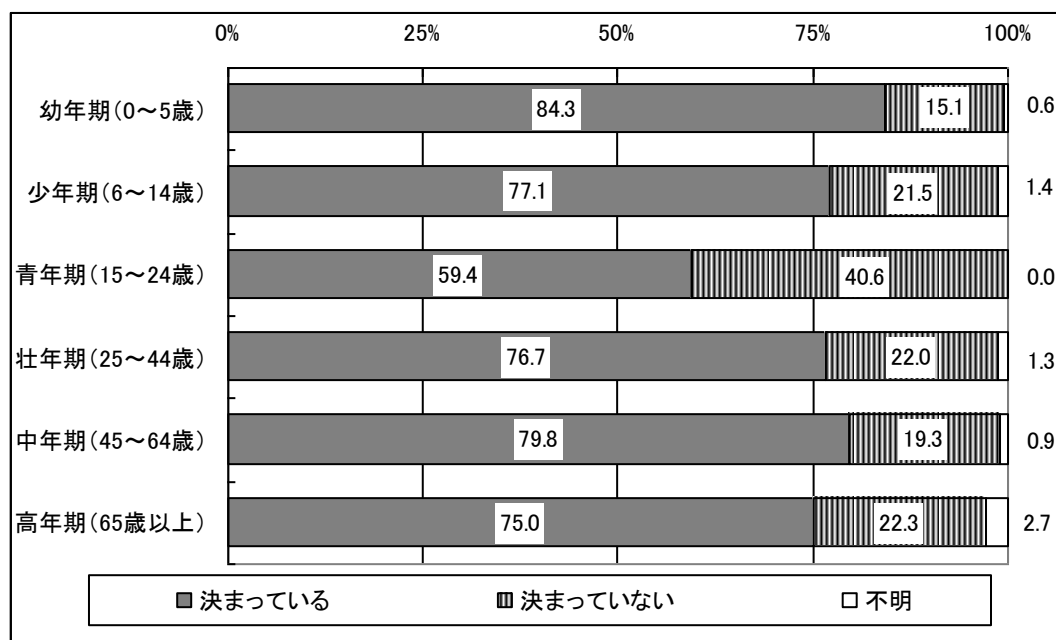
起床時間や就寝時間の生活のリズムの状況をみると、「決まっている」のは幼年期（0～5 歳）で 84.3%、少年期（6～14 歳）で 77.1%、青年期（15～24 歳）で 59.4%、壮年期（25～44 歳）で 76.7%、中年期（45～64 歳）で 79.8%、高年期（65 歳以上）で 75.0%と、青年期（15～24 歳）を除くすべてのライフステージで規則正しい生活をしている人が多くなっています。

また、睡眠時間をみると、幼年期（0～5 歳）の約半数が「10 時間以上 11 時間未満」としています。少年期（6～14 歳）では「9 時間～11 時間未満」が多くなっています。

さらには、幼年期（0～5 歳）については、午後 9 時台に就寝している人が半数となっています。また、少年期（6～14 歳）では、午後 10 時台、11 時台に就寝している人が多くなっています。一方、青年期（15～24 歳）では午前 0 時以降に就寝している人が多く、睡眠時間が短い人が多くなっています。

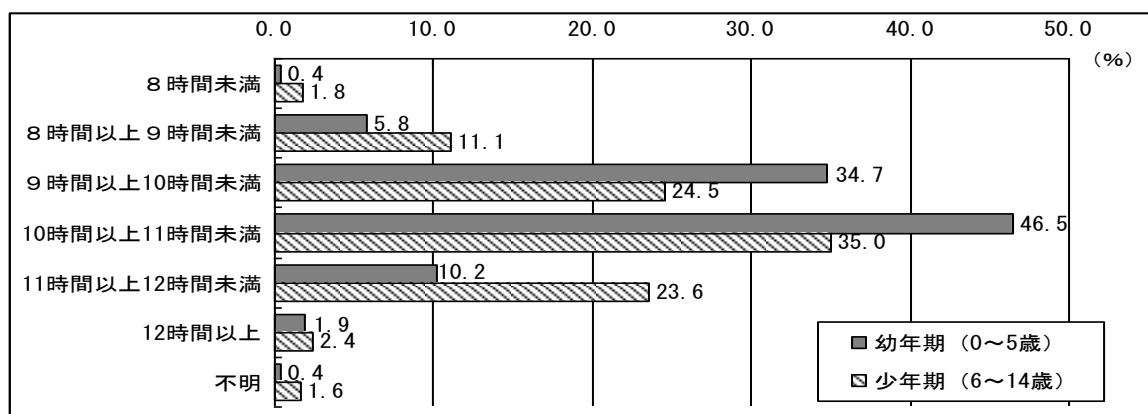
また、少年期（6～14 歳）では、約 21%が「学校でほぼ毎日眠くなる」としています。

図表16 起床時間や就寝時間の生活リズムの状況



資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

図表17 幼年期（0～5歳）、少年期（6～14歳）の睡眠時間



資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成23年10月

図表18 幼年期（0～5歳）の起床時間・就寝時間

		起床時間						
		合計	6時以前	6時台	7時台	8時台	9時以降	無回答
就寝時間	合計	100.0	1.3	27.1	60.0	9.8	1.8	0.0
	午後8時より以前	3.2	0.5	1.6	0.8	0.1	0.1	0.0
	午後8時台	22.7	0.5	11.0	10.4	0.5	0.2	0.0
	午後9時台	50.9	0.2	11.9	34.4	4.2	0.2	0.0
	午後10時台	19.3	0.0	2.5	12.2	4.2	0.3	0.0
	午後11時台	3.0	0.0	0.1	1.9	0.4	0.5	0.0
	午前0時以降	0.5	0.0	0.0	0.0	0.1	0.4	0.0
	無回答	0.4	0.0	0.0	0.2	0.2	0.0	0.0

資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成23年10月

図表19 少年期（6～14歳）の起床時間・就寝時間

		起床時間						
		合計	6時以前	6時台	7時台	8時台	9時以降	無回答
就寝時間	合計	100.0	2.1	35.6	61.3	1.0	0.0	0.0
	午後8時より以前	4.8	0.1	0.7	3.3	0.6	0.0	0.0
	午後8時台	1.2	0.1	0.9	0.1	0.0	0.0	0.0
	午後9時台	12.7	0.4	7.5	4.8	0.0	0.0	0.0
	午後10時台	33.3	0.3	12.3	20.8	0.0	0.0	0.0
	午後11時台	28.6	1.0	9.1	18.1	0.3	0.0	0.0
	午前0時以降	17.8	0.0	4.6	13.0	0.1	0.0	0.0
	無回答	1.6	0.0	0.4	1.2	0.0	0.0	0.0

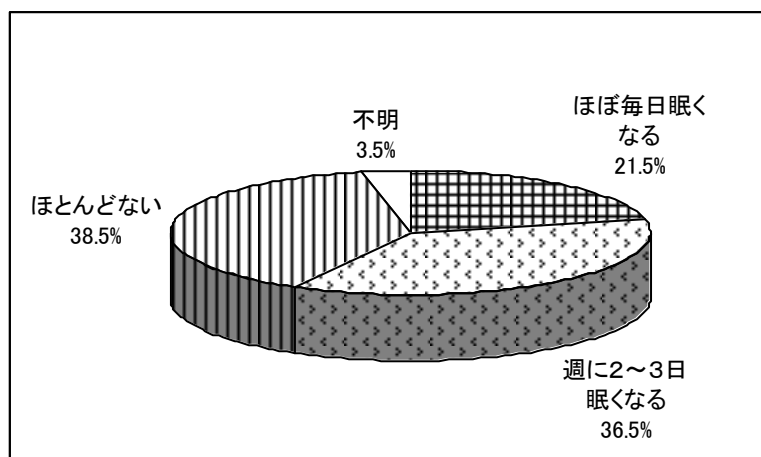
資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成23年10月

図表20 青年期（15～24歳）の起床時間・就寝時間

		起床時間						
		合計	6時以前	6時台	7時台	8時台	9時以降	無回答
就寝時間	合計	100.0	4.1	26.0	21.9	4.6	2.7	40.6
	午後8時より以前	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.9	0.0
	午後8時台	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	午後9時台	1.4	0.5	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0
	午後10時台	4.1	1.4	1.8	0.5	0.5	0.0	0.0
	午後11時台	15.1	1.4	8.2	4.6	0.5	0.5	0.0
	午前0時以降	37.4	0.9	15.1	16.4	3.7	1.4	0.0
	無回答	41.1	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	40.6

資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成23年10月

図表21 少年期（6～14 歳）の学校で眠くなることの有無

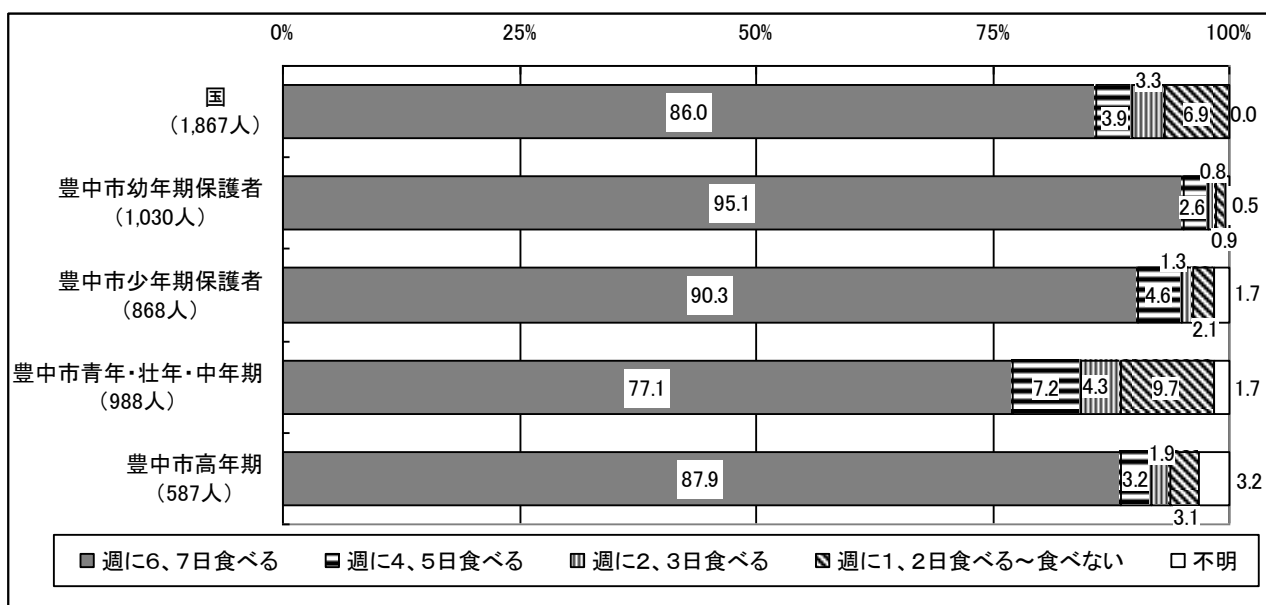


資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

● 朝食の摂取状況

朝食の摂取状況をみると、「週に 6、7 日食べる」は幼年期（0～5 歳）で 95.1%、少年期（6～14 歳）で 90.3%、青年・壮年・中年期（15～64 歳）で 77.1%、高年期（65 歳以上）で 87.9%と、すべてのライフステージで多くなっています。また、就寝時間が遅い、あるいは睡眠時間が短いと、朝食欠食率が上がる傾向があります。

図表22 朝食の摂取状況



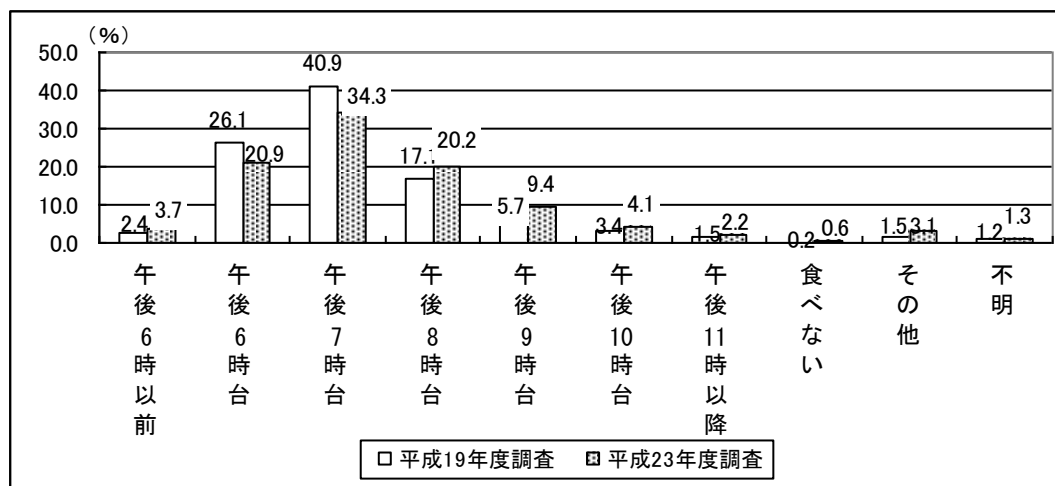
資料：内閣府「食育の現状と意識に関する調査報告書（平成 23 年 3 月）」

豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月 「幼年」は「まだ食べていない」(95 人)を除く集計

● 夕食の時間

青年・壮年・中年期の夕食の時間をみると、午後7時が最も多くなっていますが、平成19年度（2007年度）調査（以降「前回調査」）に比べて午後8時台、9時台が増加してきており、夕食の時間が遅くなっていることがうかがえます。

図表23 青年・壮年・中年期の夕食の摂取状況

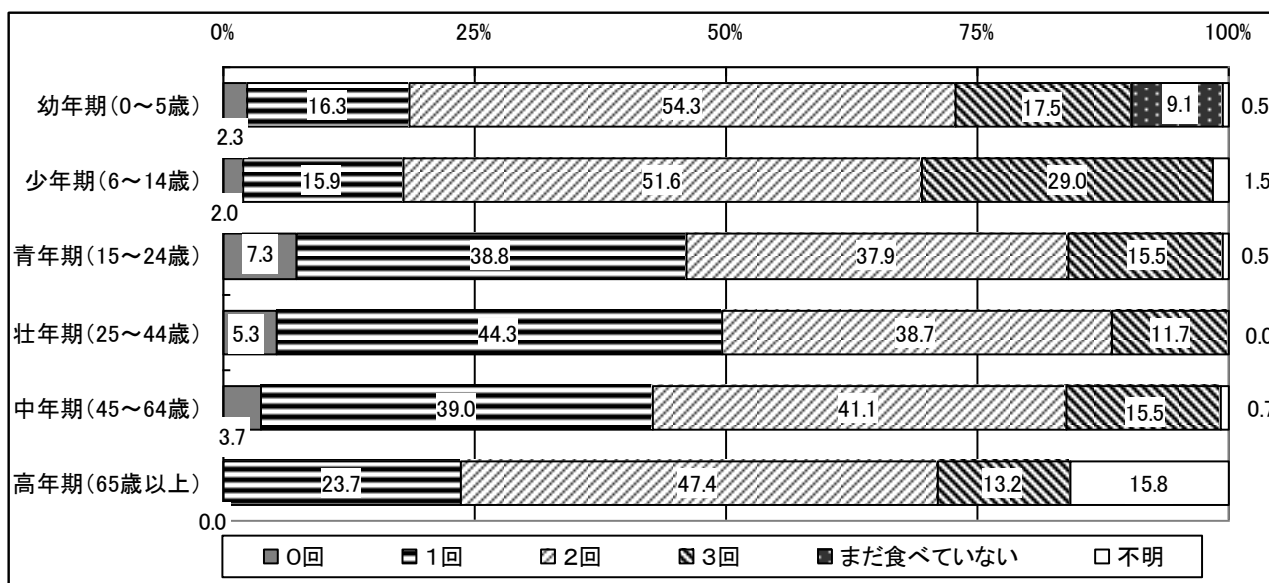


資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成23年10月

● 食事のバランス

主食・主菜・副菜が揃った食事の回数をみると、幼年期（0～5歳）、少年期（6～14歳）、高年期（65歳以上）は「2回」の人が半数前後を占めています。一方、青年・壮年・中年期（15～64歳）では「1回」の人が多くなっており、青年・壮年・中年期（15～64歳）はバランスのとれた食事をするのが難しい状況にあります。

図表24 主食・主菜・副菜が揃った食事の回数

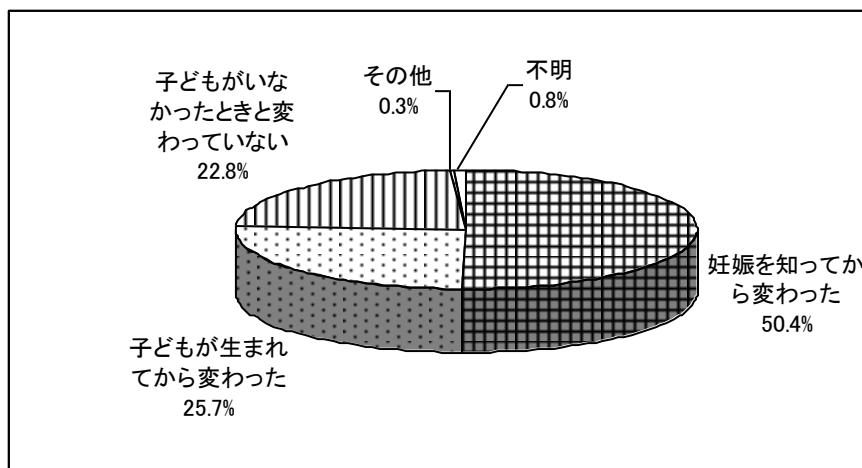


資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成23年10月

● 妊娠をきっかけとする食への意識の変化

幼年期（0～5 歳）保護者の妊娠をきっかけとする食への意識の変化をみると、半数が「妊娠を知ってから変わった」としています。

図表25 幼年期（0～5 歳）保護者）妊娠をきっかけとする食への意識の変化



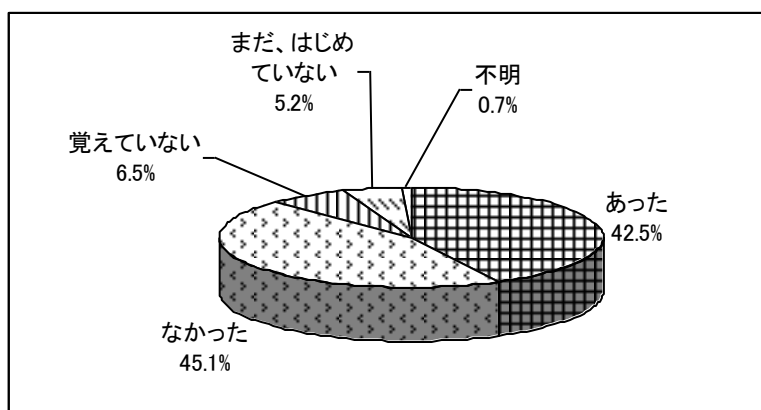
資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

● 離乳食で困ったことの有無や困ったことの内容

離乳食で困ったことのある人は約 42%となっています。

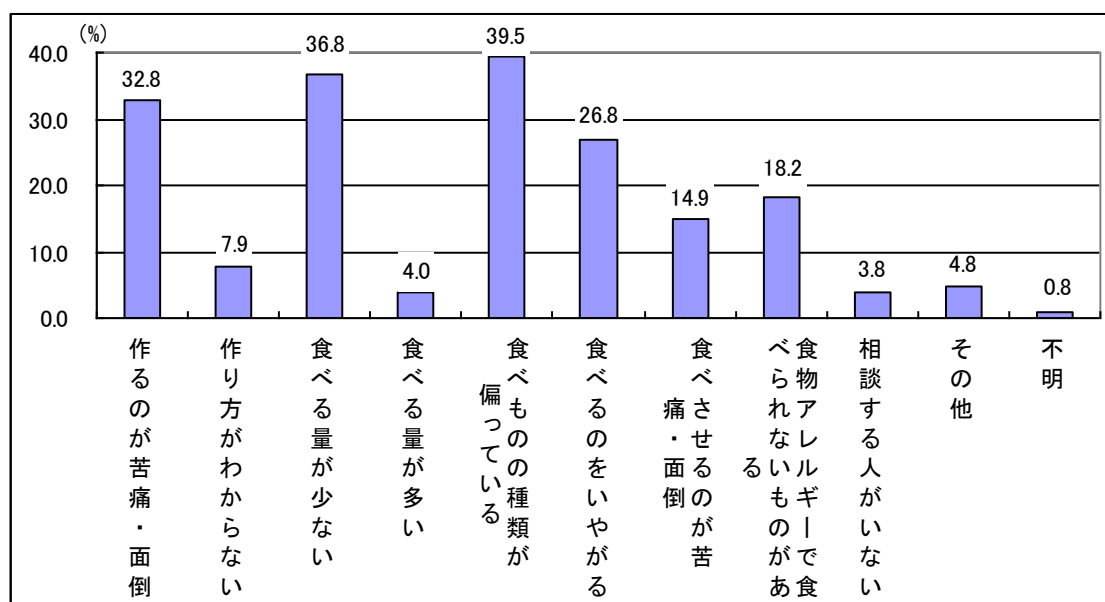
困ったことの内容としては、「食べ物の種類が偏っている」、「食べる量が少ない」、「作るのが苦痛・面倒」といったことをあげる人が多くなっています。またその他では「食物アレルギーで食べられないものがある」とする人も約 18%います。

図表26 （幼年期（0～5 歳）保護者）離乳食で困ったことの有無



資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

図表27 (幼年期(0～5歳)保護者) 離乳食で困ったことの内容



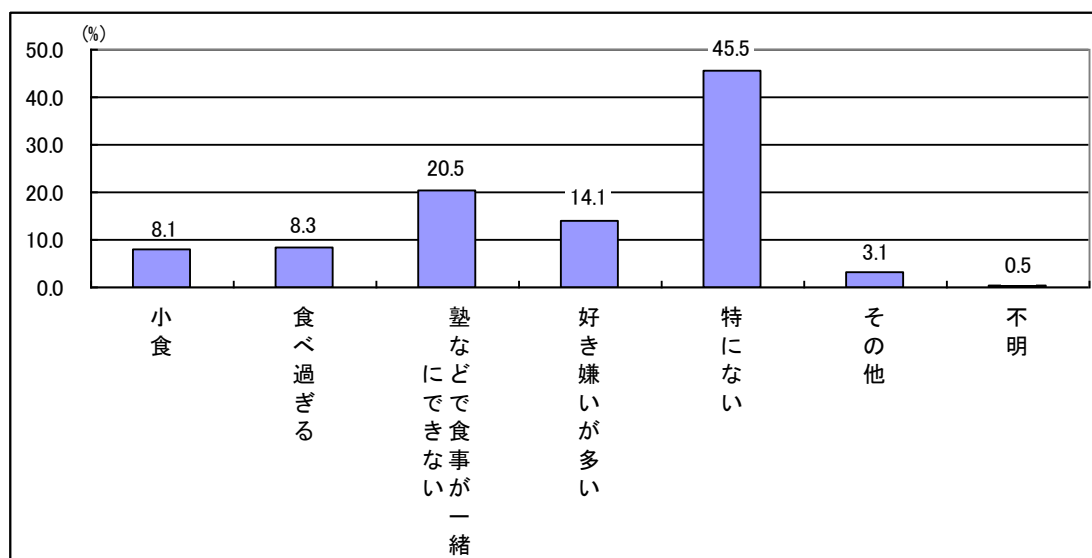
資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

● 子どもの食事での困りごと

少年期(6～14歳)保護者の子どもの食事での困りごとをみると、半数弱が「特にない」(45.5%)となっています。それ以外では「塾などで食事が一緒にできない」をあげる人が多くなっています。

また、『おいしく食べられる』かどうかについては、高年期(65歳以上)以外のすべてのライフステージにおいて「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」が9割程度となっていますが、高年期(65歳以上)は7.5割にとどまっています。

図表28 少年期(6～14歳)保護者の子どもの食事での困りごと

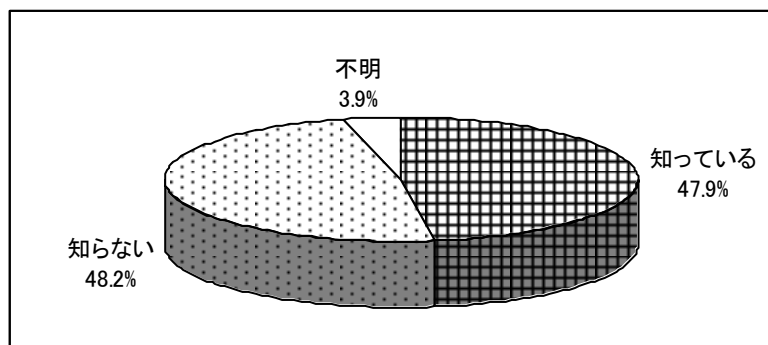


資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

● 「低栄養」の認知度

高年期（65 歳以上）の「低栄養」の認知度をみると、知っている人と知らない人が同割合となっています。

図表29 （高年期（65 歳以上））「低栄養」の認知度

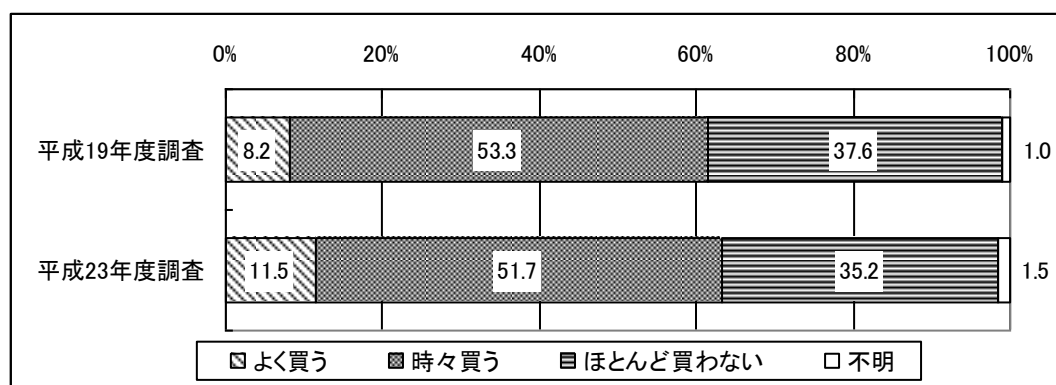


資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

● 弁当・総菜の購入や外食の頻度

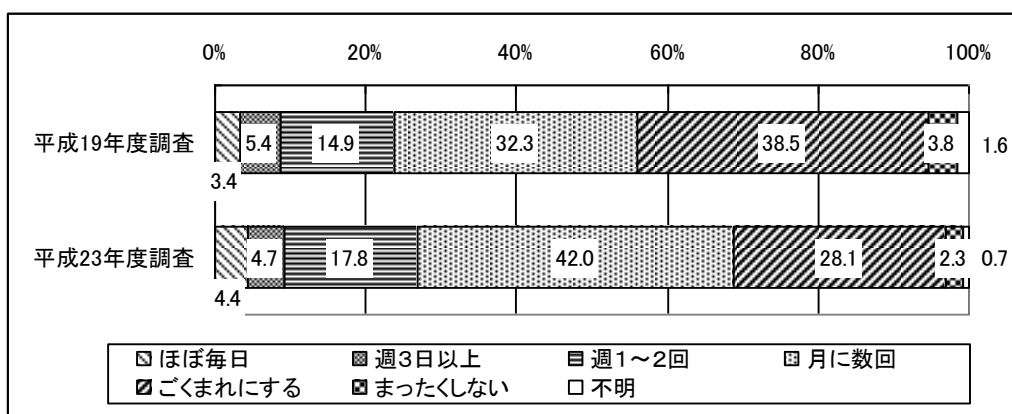
青年・壮年・中年期の弁当や総菜の購入頻度をみると、「よく買う」人が前回調査に比べて増えています。また、外食の頻度をみると、週に 1 回以上する人は約 27%と前回に比べて約 3 ポイント増加しています。また、「月数回」の人も約 10 ポイント増加しています。

図表30 青年・壮年・中年期の弁当や総菜の購入頻度



資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

図表31 青年・壮年・中年期の外食の頻度

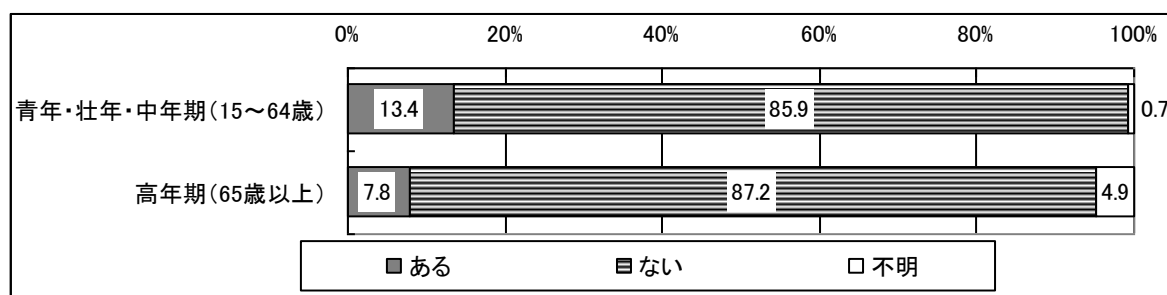


資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

● 「うちのお店も健康づくり応援団の店」*1の認知度

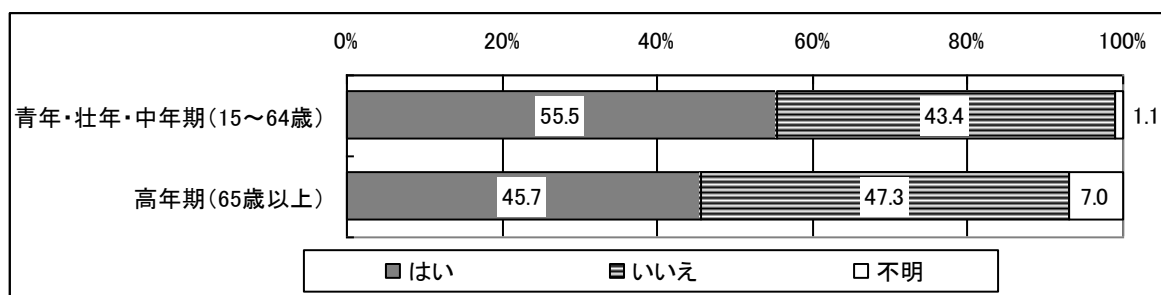
外食メニューの栄養成分表示やヘルシーメニューの提供をしている「うちのお店も健康づくり応援団の店」は平成 23 年度末現在で市内に 417 店舗あります。しかし、マークの認知度（青年・壮年・中年期（15～64 歳））をみると、13.4%と低くなっています。一方で、外食などにおけるヘルシーメニューの提供希望者（青年・壮年・中年期（15～64 歳））は 55.5%となっています。

図表32 「うちのお店も健康づくり応援団の店」マークの認知度



資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

図表33 外食などでヘルシーメニューの提供を希望



資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

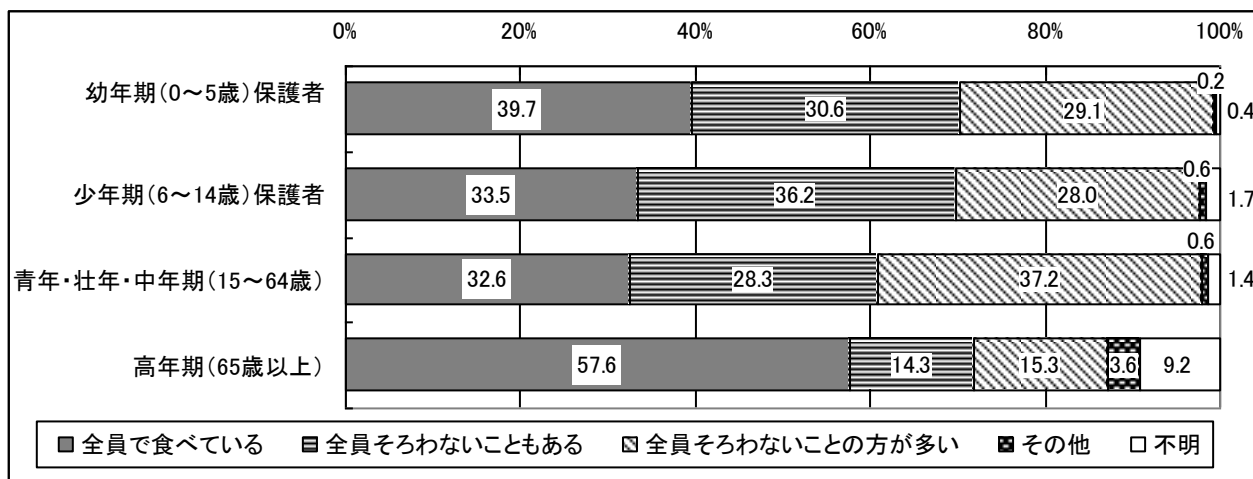
*1 「うちのお店も健康づくり応援団の店」：主なメニューの栄養成分表示や食事バランスガイドによる表示、ヘルシーメニュー（野菜たっぷりメニューなど）の提供、ヘルシーオーダーの実施、たばこ対策など健康づくりに取り組むお店です。

Ⅲ 食を通じたコミュニケーションについて

●孤食^{*1}の状況

「孤食」の状況をみると、夕食を家にいる人「全員で食べている」が幼年期（0～5歳）保護者で39.7%、少年期（6～14歳）保護者で33.5%、青年・壮年・中年期（15～64歳）で32.6%となっており、高年期（65歳以上）の57.6%に比べると低くなっています。

図表34 孤食の状況

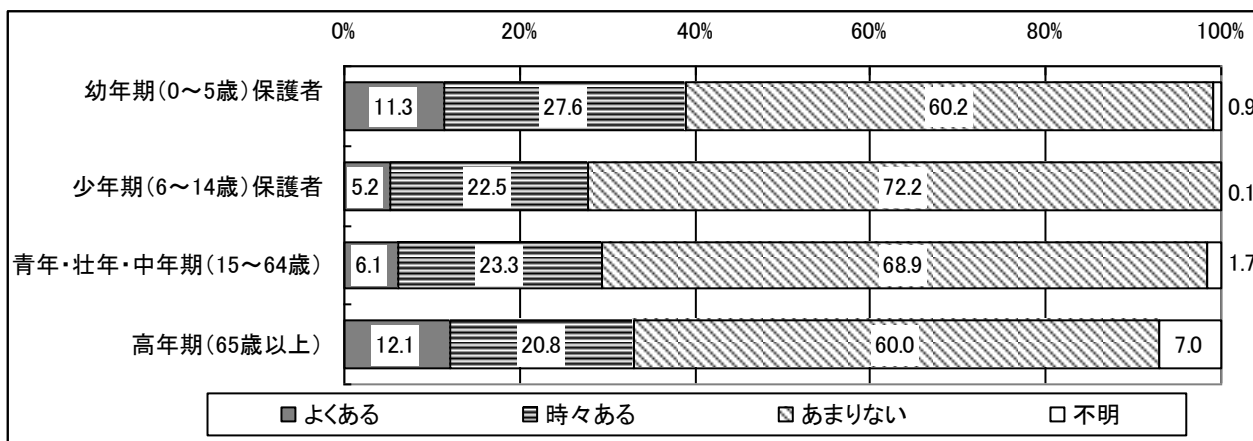


資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成23年10月 「青年・壮年・中年期、高年期」は「2人以上で住んでいる人」のみ回答

●個食^{*2}の状況

「個食」の状況をみると、すべてのライフステージにおいて「あまりない」が6割から7割程度となっています。豊中市では「個食」より「孤食」が注目されます。

図表35 別メニューを食べること



資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成23年10月 「青年・壮年・中年期、高年期」は「2人以上で住んでいる人」のみ回答

*1 孤食：家族が一緒に暮らしているのに、ひとりで食事をする事。

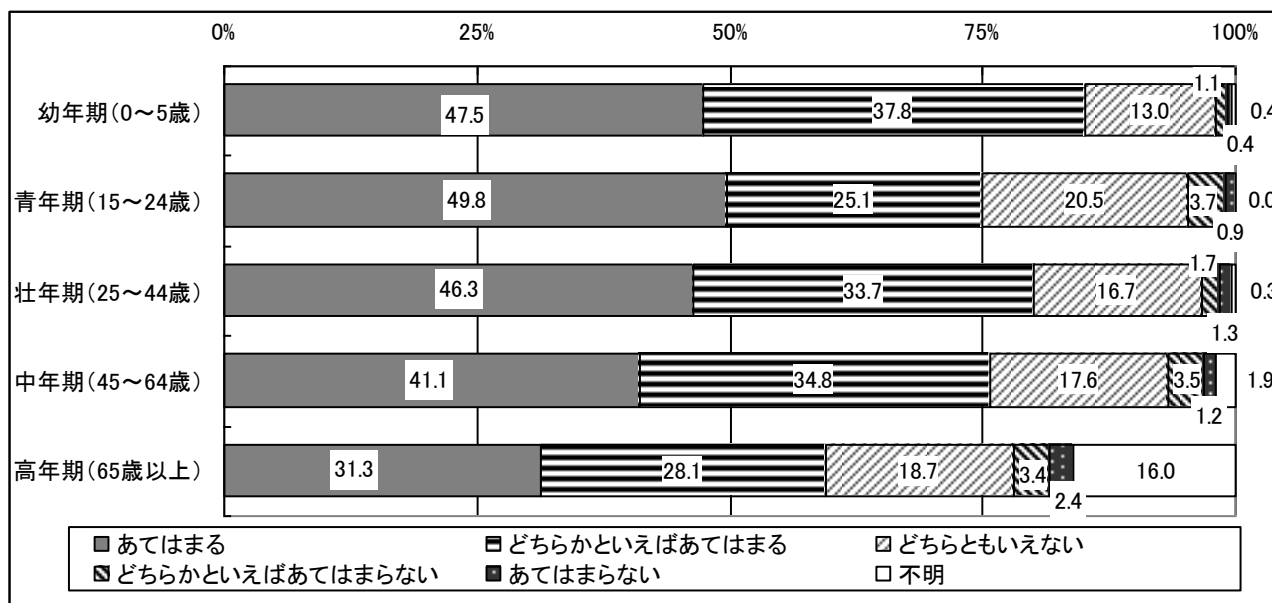
*2 個食：家庭で一緒に食事をする人が、それぞれ別のメニューを食べること。

● 家庭での食生活の様子

家庭での食生活の様子のうち、『食事が楽しい』かどうかをみると、高年期（65 歳以上）以外のすべてのライフステージにおいて「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」が7 割から8 割程度となっています。一方、高年期（65 歳以上）は6 割にとどまっています。

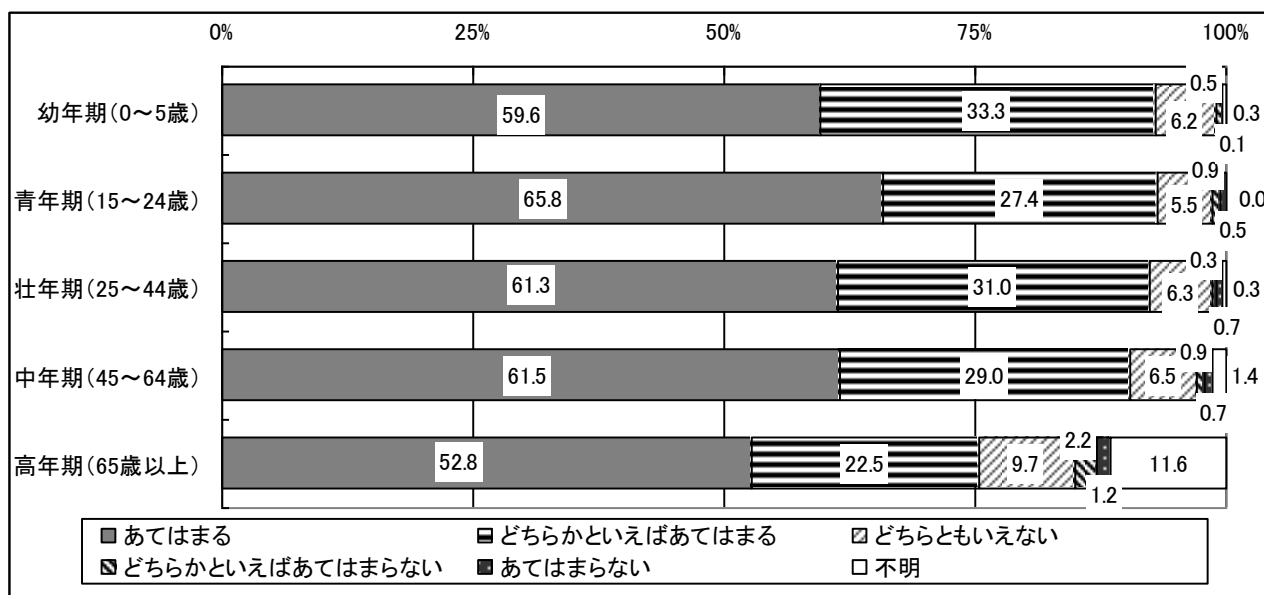
また、『おいしく食べられる』かどうかについては、高年期（65 歳以上）以外のすべてのライフステージにおいて「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」が9 割程度となっていますが、高年期（65 歳以上）は7.5 割にとどまっています。

図表36 【家庭での食生活の様子】食事が楽しい



資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

図表37 【家庭での食生活の様子】おいしく食べられる

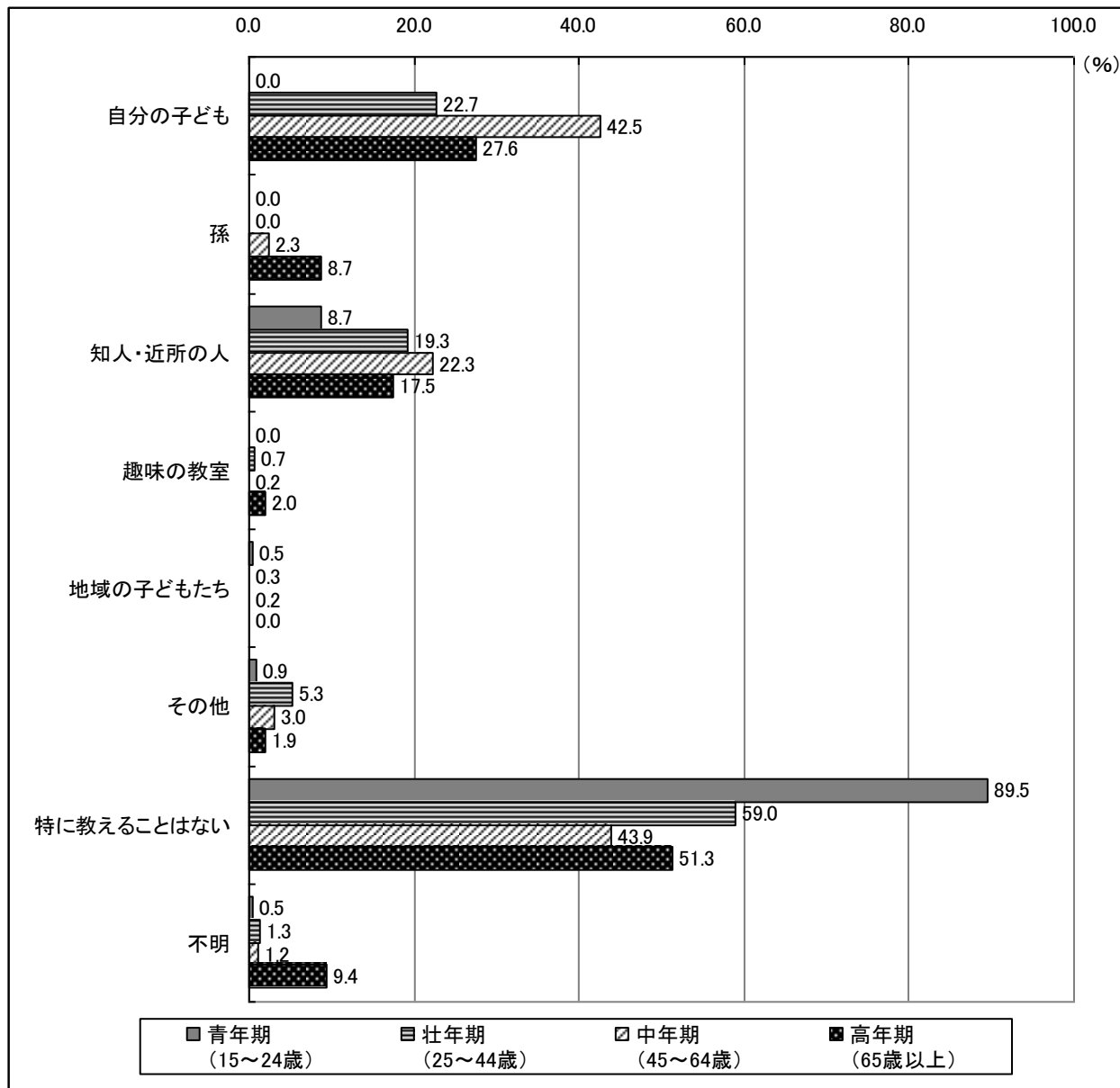


資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

● メニューや調理方法の伝授の有無

メニューや調理方法の伝授の有無をみると、青年期（15～24 歳）以外は半数前後が誰かに伝授しています。中でも壮年期（25～44 歳）は「自分の子ども」に伝授している人が4 割程度います。

図表38 メニューや調理方法の伝授の有無



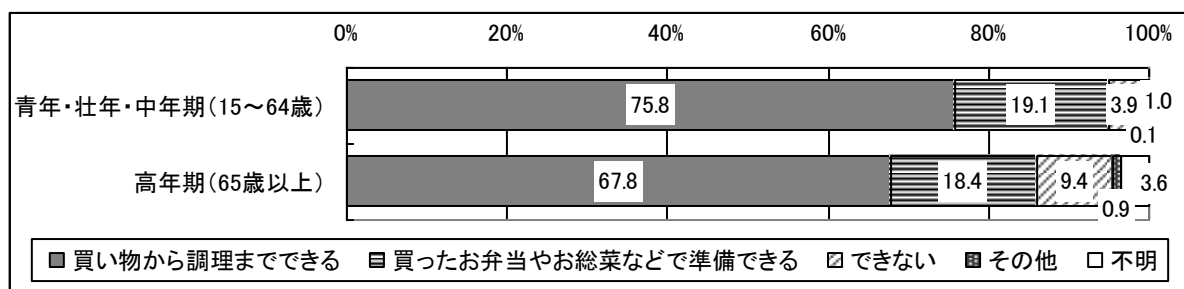
資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

● 1人での食事の準備

1人で1回分の食事の準備ができる人をみると、青年・壮年・中年期（15～64歳）、高年期（65歳以上）とも「買い物から調理までできる」が7割程度となっていますが、「できない」が1割程度います。

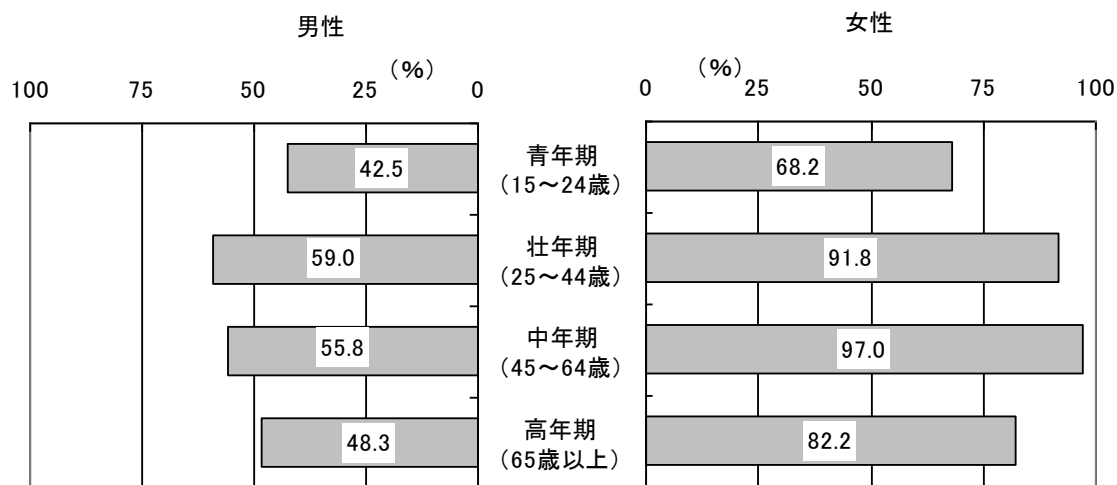
また、性別でみると、すべてのライフステージにおいて、「買い物から調理までできる」について男性より女性の方が多くなっています。また、男性においては、ライフステージが上がってもあまり「買物から調理までできる」割合が増えません。

図表39 1人での食事の準備



資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成23年10月

図表40 1人での食事の準備（買い物から調理までできる）

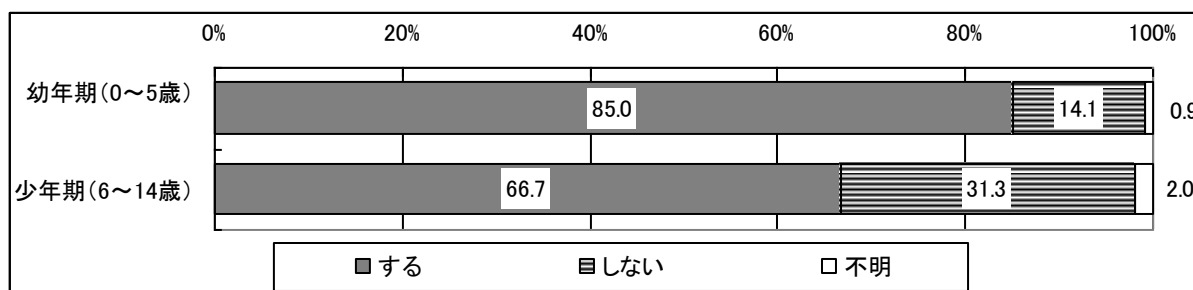


資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成23年10月

● 食事の手伝いの状況

食事の手伝いの状況を見ると、「手伝いをさせている（する）」は幼年期（0～5 歳）で 85.0%、少年期（6～14 歳）で 66.7%となっており、年齢が上がるにつれて手伝いをしなくなる傾向にあります。

図表41 食事の手伝い



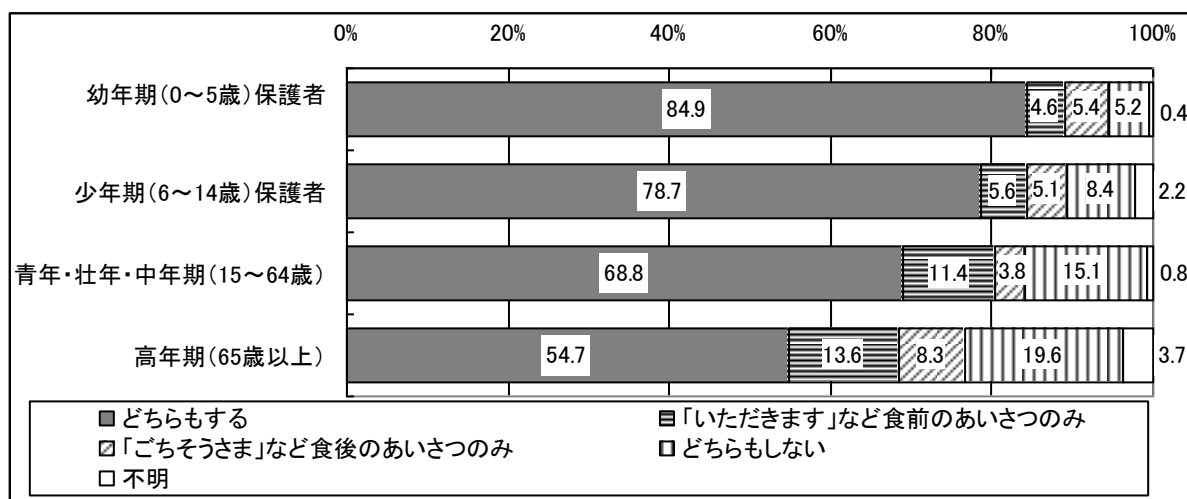
資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月 「幼年期」は「まだできない」(430 人)を除く集計

IV 食の恵みへの理解と感謝、環境との調和について

● 食事の前後であいさつをする人の割合

「いただきます」や「ごちそうさま」などの食前食後のあいさつを「どちらもする」人は、幼年期（0～5歳）で84.9%、少年期（6～14歳）は78.7%、青年・壮年・中年期（15～64歳）は68.8%、高年期（65歳以上）は54.7%となっており、ライフステージが上がるにつれて、「いただきます」や「ごちそうさま」を「どちらもする」人が少なくなっています。

図表42 食前食後のあいさつ

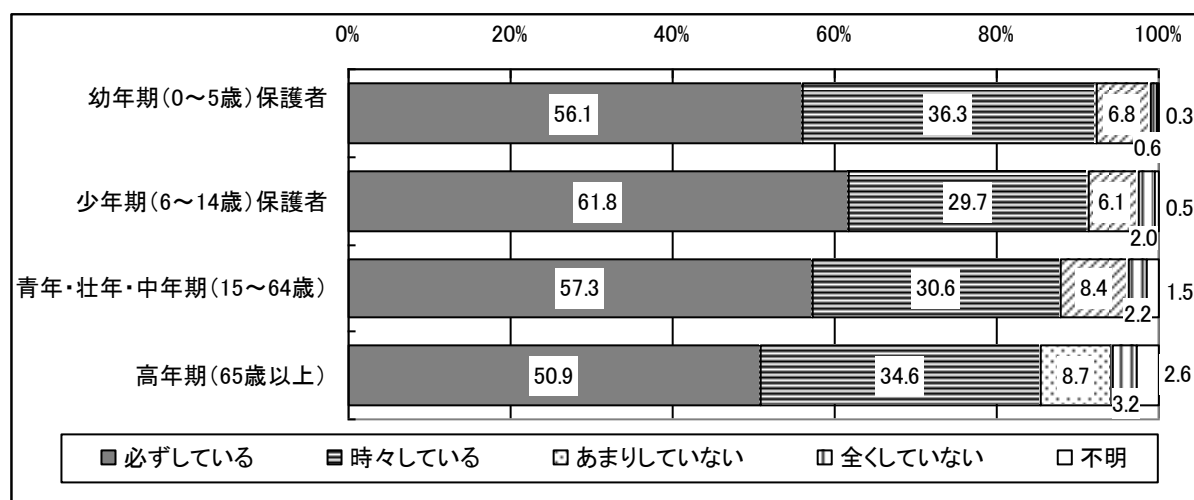


資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成23年10月 「幼年期」は「まだ食べていない」(88人)を除く集計

● 食べ残しを減らす努力

食べ残しを減らす努力を「必ずしている」「時々している」人は、すべてのライフステージで8割を超えています。

図表43 食べ残しを減らす努力



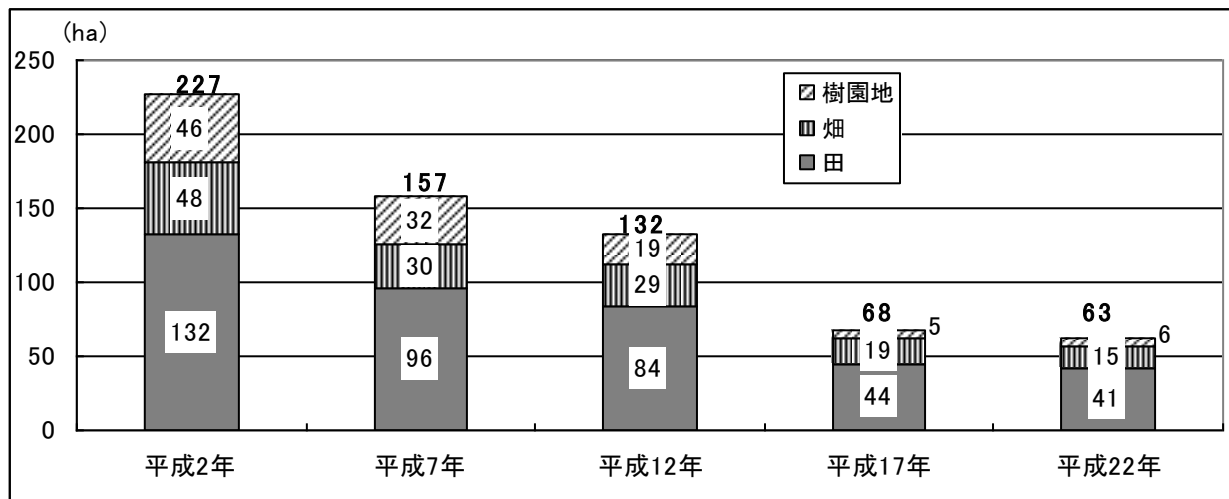
資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成23年10月

● 農業生産の状況

平成 22 年（2010 年）国勢調査をみると、第 1 次産業は 0.3%、第 2 次産業は 20.7%、第 3 次産業は 79.0%で、第 1 次産業に属する農業従事者は少ない状況です。

豊中市における農地は年々減少しており、平成 22 年（2010 年）には 63 ヘクタール*¹、市の総面積に占める割合は 1.7%です。また、生産状況をみると、作付面積は 40 ヘクタールで、稲作が 28 ヘクタール、花き類・花木が 7 ヘクタールとなっています。現在では農産物の生産現場を見たり、実際に栽培するといった農体験の場が減少しています。

図表44 農業生産の状況



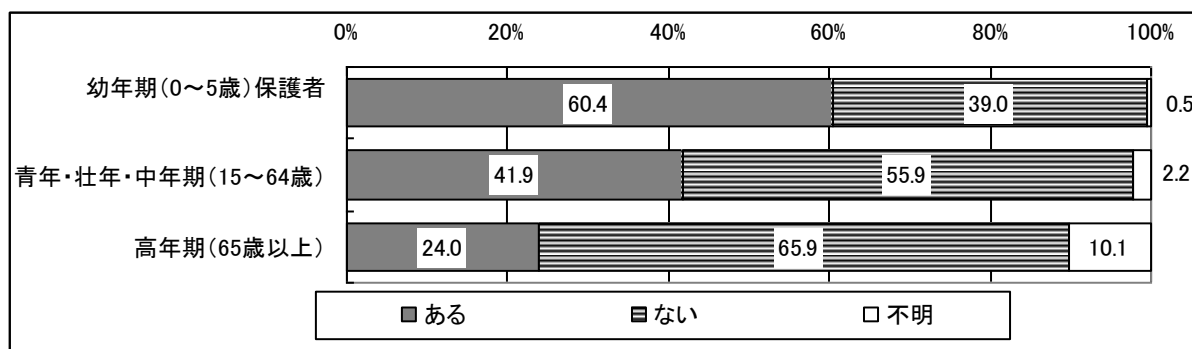
資料:「平成 22 年世界農林業センサス」

● 農体験への興味

市民が農に触れるための市民農園は平成 23 年度（2011 年度）で 29 か所（1,217 区画）あります。農体験への興味をみると、幼年期（0～5 歳）保護者で 60.4%と高い一方で、青年・壮年・中年期（15～64 歳）と高年期（65 歳以上）はそれぞれ 41.9%、24.0%と低くなっています。

また、少年期（6～14 歳）の体験してみたい農体験については、「餅つき」、「野菜の収穫」、「芋ほり」が高くなっています。

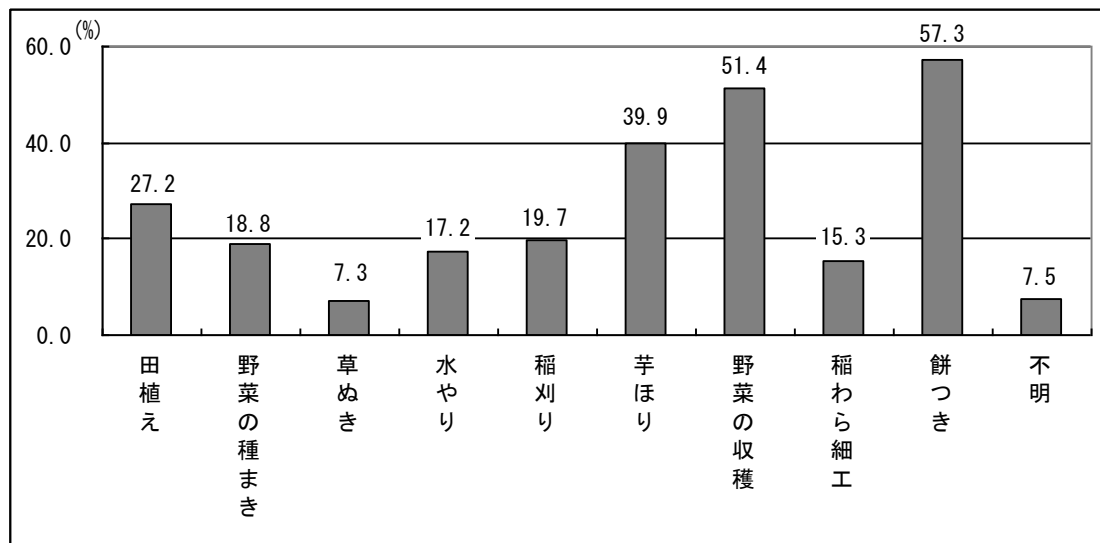
図表45 農体験の興味



資料:豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

*1 ヘクタール:1 ヘクタールは 100 アール、1 アールは 100 m²。

図表46 体験してみたい農体験（少年期（6～14歳）（複数回答）

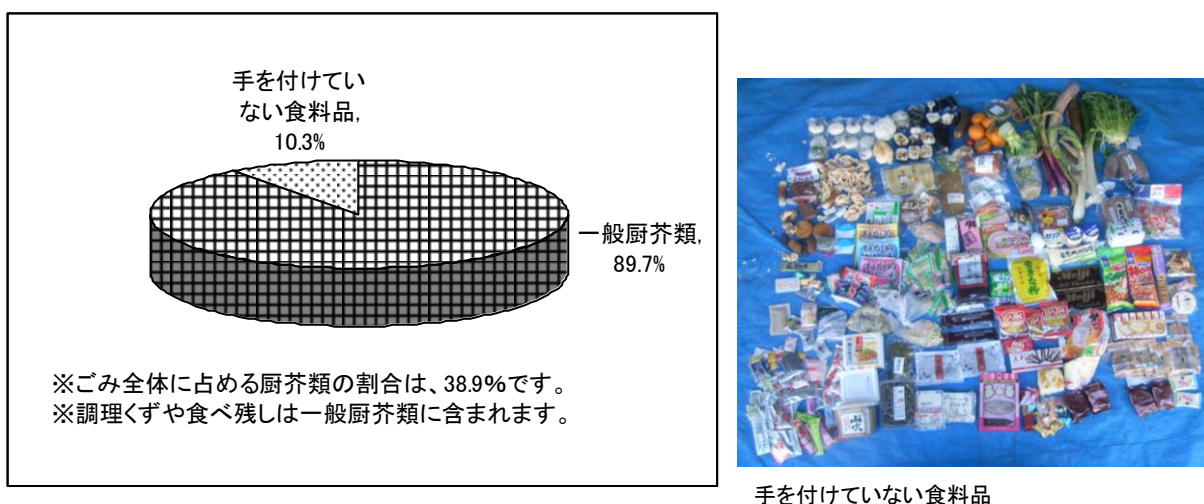


資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

● 環境との調和

食べられる量だけを買ひ、無駄なく調理して残さず食べることにより、食品の廃棄をできる限り減らす取り組みを進めています。平成 20 年度(2008 年度)豊中市家庭系ごみ質調査において「^{ちゅうかい}厨芥類*¹中の『手を付けていない食料品』の割合」は 10.3%となっています。また、環境への負荷の低減をめざして循環型社会を推進するために、学校給食から発生する生ごみと剪定枝の再資源化に取り組んでいます。豊中市内の農家と連携して、再資源化による生産物「とよっぴー*²」を使って育てた野菜などを学校給食食材に提供する地産地消にも取り組んでおり、23 年度(2011 年度)の実績は使用回数 55 回で総重量 26,067.1 kg となっています。

図表47 家庭から排出される『手を付けていない食料品』



資料:平成 20 年度豊中市家庭系ごみ質調査結果

図表48 平成 23 年度 とよっぴー野菜・米の種類別給食使用回数と使用量

種類	回数	重量	種類	回数	重量
青ねぎ	11 回	348.3 kg	なす	1 回	7.2 kg
えんどう豆	1 回	78.7 kg	人参	1 回	11.2 kg
金時人参	2 回	27.6 kg	ピーマン	1 回	3.6 kg
春菊	3 回	59.4 kg	モロヘイヤ	2 回	45.7 kg
大根	5 回	723.4 kg	玉ねぎ	12 回	7,110.7 kg
チンゲン菜	1 回	8.9 kg	米(ヒノヒカリ)	13 回	17,640.0 kg
土しょうが	2 回	2.4 kg	合計	55 回	26,067.1 kg

*1 厨芥類: 台所から出る野菜のくずや食べ物の残りなどのごみ

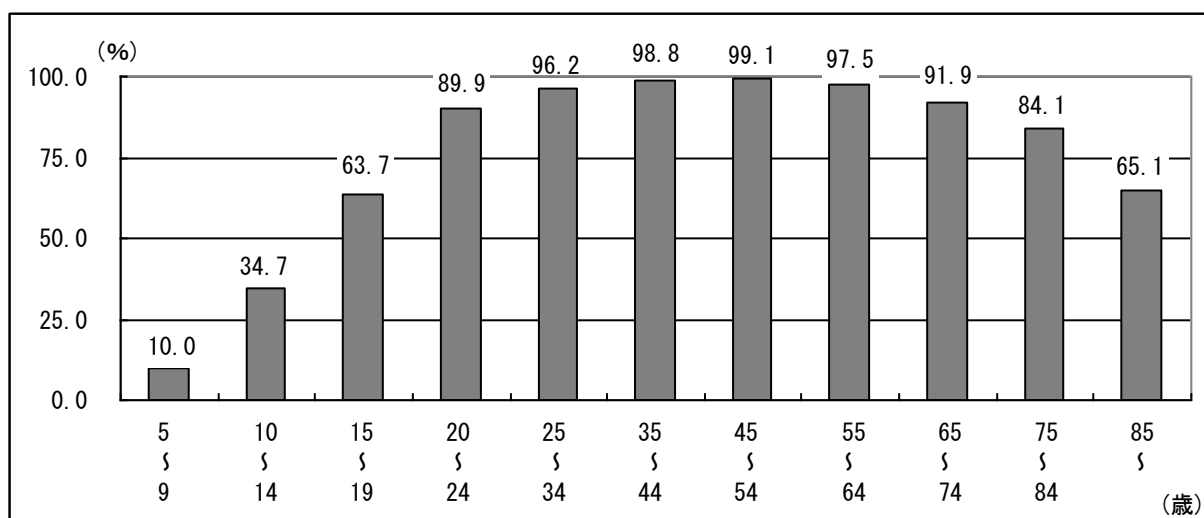
*2 とよっぴー: 学校給食から発生する調理くず、食べ残しと街路樹等の剪定枝をチップ化したものを混合し、発酵・熟成させてできあがった堆肥(土壌改良材)。

V 歯や口の健康について

● 歯を失う原因

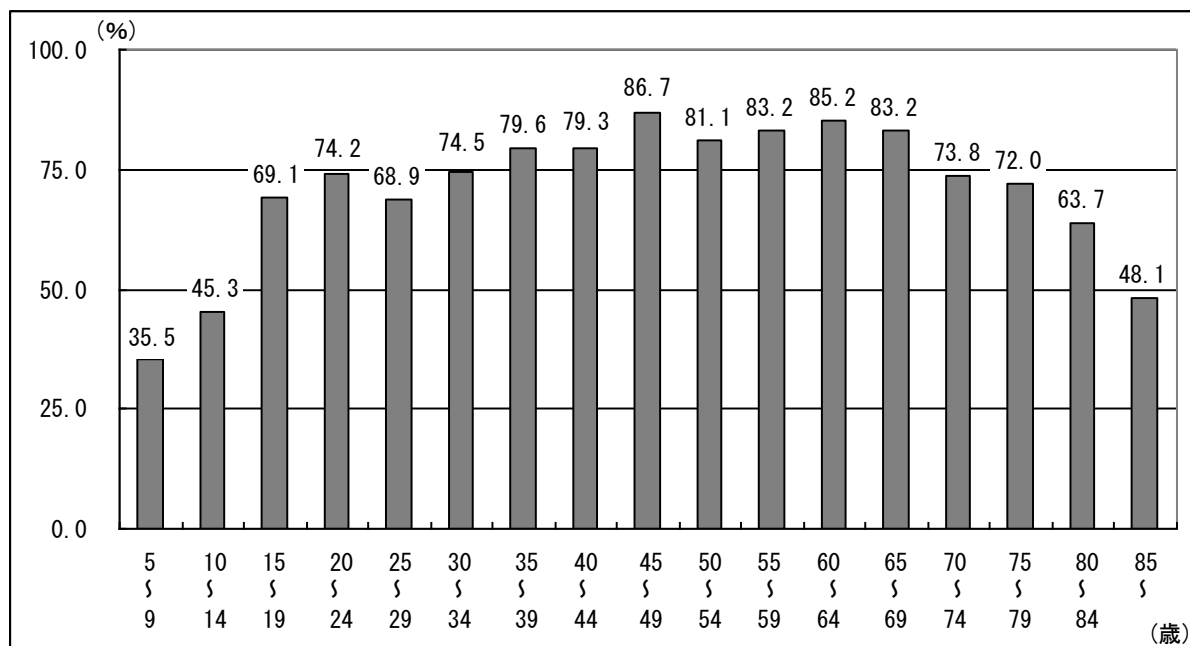
歯を失う原因の多くは、むし歯と歯周病です。国の「歯科疾患実態調査」をみると、「永久歯のむし歯を持つ人の割合」は10歳代以降で急激に増加し、20歳以降には約9割となります。また、「歯周病の所見や症状のある人の割合」をみると、すでに15歳以降で7割近くとなり、45～69歳では、8割を超えています。

図表49 永久歯のむし歯をもつ人の割合



資料:厚生労働省「歯科疾患実態調査」平成23年

図表50 歯周病の所見や症状のある人の割合

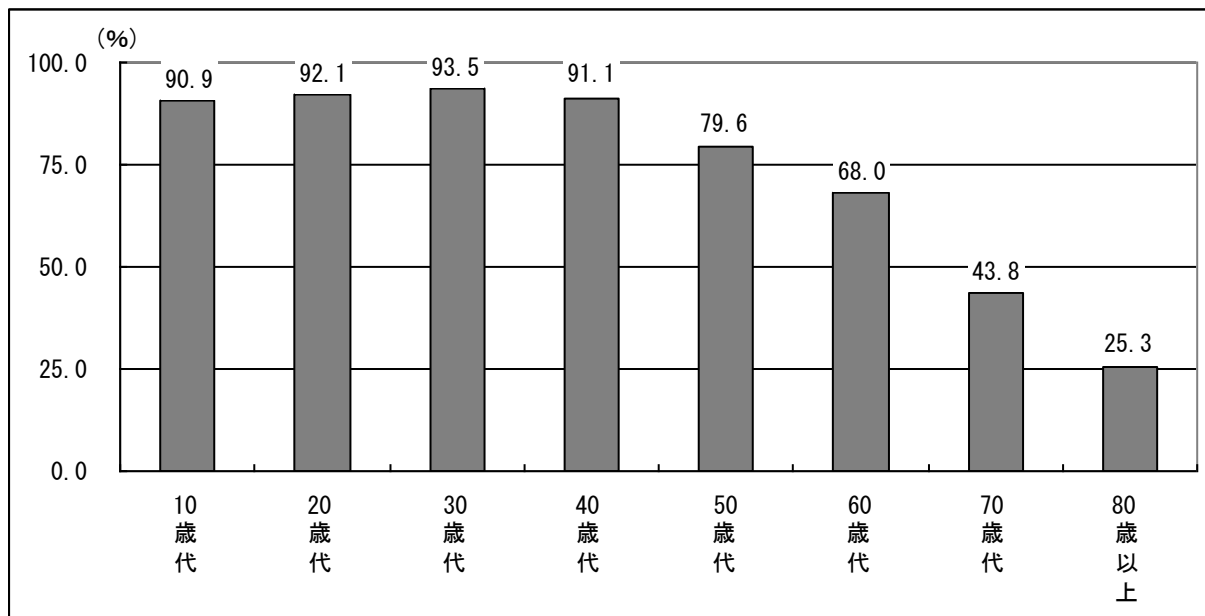


資料:厚生労働省「歯科疾患実態調査」平成23年

● 自分の歯が 20 本以上残っていると答えた人の割合

「生活習慣と健康意識に関するアンケート調査」で「自分の歯が 20 本以上残っている」と答えた人の割合をみると、50 歳代以降で減少傾向がみられます。

図表51 自分の歯が 20 本以上ある割合

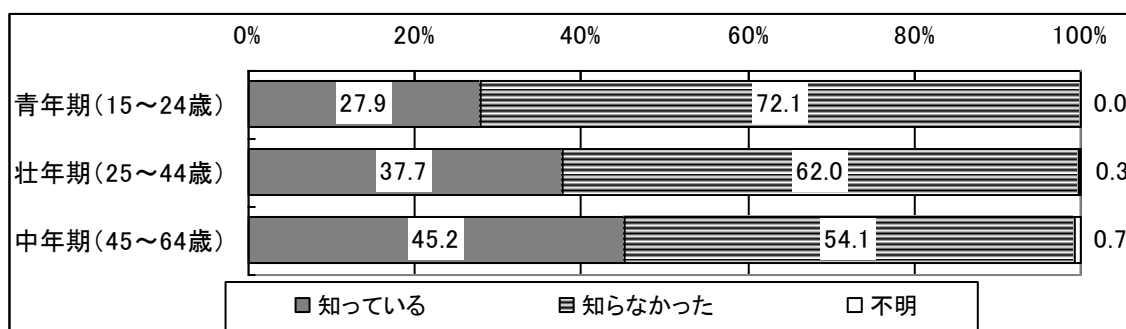


資料：豊中市「生活習慣と健康意識に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

● 糖尿病と歯周病の関係の認知度

歯周病は、糖尿病の合併症の 1 つと言われています。糖尿病の人はそうでない人に比べて歯周病にかかっている率が高く、しかも、重症化しやすくなっています。糖尿病と歯周病は互いに影響しあい、それぞれが悪化する原因となることを「知らなかった」が青年期（15～24 歳）、壮年期（25～44 歳）、中年期（45～64 歳）とも半数以上を占めています。

図表52 糖尿病と歯周病の関係の認知度

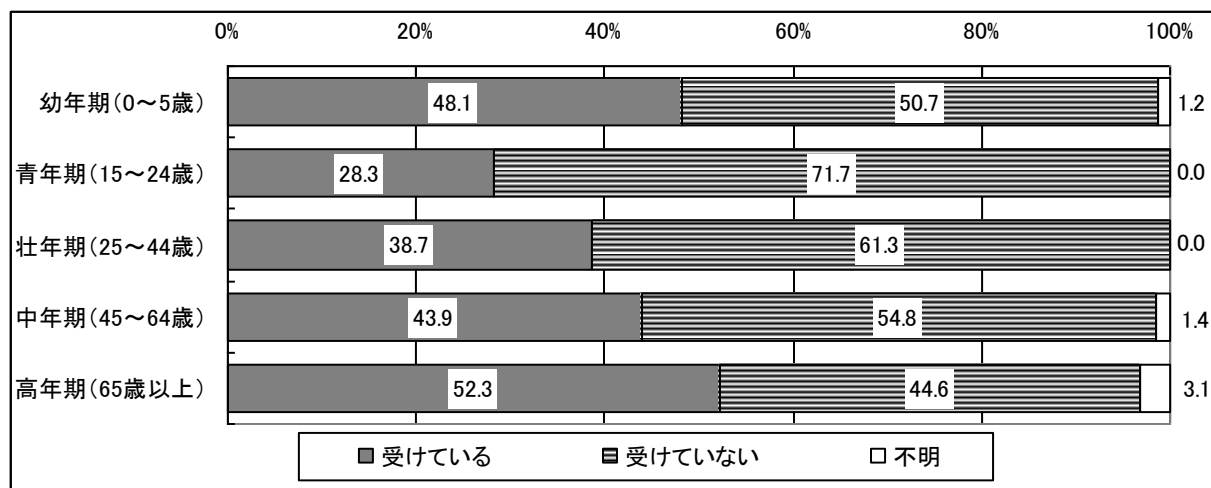


資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成 23 年 10 月

● 定期的な歯科検診の受診状況

子どもの頃から、治療だけでなく、むし歯や歯周病の予防、また、歯みがき方法のチェックなどを目的とした、かかりつけ歯科医への定期的な受診習慣をつけておくことは、生涯にわたっての歯や口の健康づくりにつながります。定期的な歯科検診の受診状況をみると、「受けている」は幼年期（0～5歳）で48.1%、青年期（15～24歳）で28.3%、壮年期（25～44歳）で38.7%、中年期（45～64歳）で43.9%、高年期（65歳以上）で52.3%となっています。

図表53 定期的な歯科検診の受診



資料：豊中市「食生活と生活習慣に関するアンケート調査」平成23年10月